
A.O.G ～真剣で代行者に恋しなさい！～

反省猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A・O・G 〽真剣で代行者に恋しなさい！〽

【Nコード】

N5712Y

【作者名】

反省猫

【あらすじ】

天錠 暁は、ウサギみたいな生物を助けた事により神と出会う。

そして、神は、暁にある提案をするのだが・・・。

※この作品は、真剣で私に恋してる！の設定を使った二次創作作品です。

最強・チート・キャラ崩壊苦手な方、原作が好きな方は、ご遠慮ください。それでもいいよという方は、どうぞ暇つぶしにお読みください。

11／22に全話加筆修正完了いたしました。よかったら再度どうぞ♪

P r o l o g u e 『神の代行者』 （前書き）

初投稿です。どうも作者の反省猫です。この作品は、結構原作ブレイクとかしますので、主人公最強です。原作が好きな方は読まない事をおすすめします。それでもいい方は、どうぞ暇つぶしにお読みください。基本バッドエンドとか嫌いなので、ハッピーエンド目指したいと思います。

※神様の名前変更しました。ルー師範代と被るので（いまさら！）あと、加筆修正致しました。

Prologue 『神の代行者』

とりあえず、整理してみよう。

俺の名前は、てんじょう あきら天錠 暁

アニメとか小説やゲームを愛するまあいわゆるオタクな大学生だ。

ある日、前々からほしかったゲームを買って意気揚々と帰っていると、ウサギのような変な生き物が

子供たちに苛められているのを見かけた。

とりあえず、そのまま見過ごすのも嫌だったので、ちょうど持ってたカードゲームの

レアカードを少年たちに渡すと少年たちは、もらったカードに夢中で

そのウサギもどきに興味が無くなり、その場から去っていた。

苛められていたウサギもどきは、左前足を怪我していたので、とりあえず家に連れて帰り手当てした。

手当てした後に、驚く事が起こった。そのウサギもどきがしゃべり始めたのだ。

ウサギ？

「いやあゝ、助かりましたゝ。あなたは、命の恩人です」

暁

「うお！　しゃ、しゃべった！」

俺は、思わず腰を抜かした。

ウサギ？

「あ、申し遅れました！　私、神の従者をしております稲葉いなばと申します。

以後お見知りおきを　ペコリ」

そう言うのと稲葉と名乗ったウサギもどきが丁寧にお辞儀をした。

暁

「あ、これは、ご丁寧に俺の名前は、天錠　暁です。よろしく」

暁も正座をし、そう言って頭を下げた。

稲葉

「それにしても、最近では珍しい正義感を持った人ですね」

暁

「いや、俺はただ見過ごせなかっただけです」

そう言って、謙遜する。

稲葉

「それでも、他の人々は、見て見ぬふりだったのにあなたは、私を助け、手当までしてくれた。本当に感謝いたします」

暁

「いえ、当たり前前の事ですから、頭を上げてください」

稲葉は、
じーと暁を見ている。

曉

「な、何か？」

稻葉

「ふむ、あなたなら我、主に合わせてもいいかもしれません」

曉

「主と言うと……
か、神様あ!!!!!!!!!!」

稻葉

「はい！ 善は急げと申します。行きますよ」

曉

「行きますよーって…… うわあー！！」

稲葉にタッチされた瞬間、二人はどこかへ転移した。

曉

「うんん……ここは……どこだ？」

暁はどうやら気絶をしていたらしく、目が覚めると見知らぬ部屋の床に横たわっていた。

???

「クスクスッ……」

誰かの笑い声が聞こえたので、その声のした方向を見ると金髪の可愛らしい女の子が立っていた。

暁

「君は……？」

??

「私は、ルカⅡツヴァイトⅡルミナス。あなたたちが言う処の【神】よ」

暁

「へ？ あなたが神様？」

ルカ

「あ、その神様って呼び方嫌いだから、ルカでいいわ」

暁

「（神っぽくないな）じゃ、ルカで。えーと俺の名前は……」

ルカ

「知ってるわ。天錠 暁でしょ？ そうねー、私はアキラと呼ぶわ！」

そう言って、暁を品定めする目で全身を見て

ルカ

「んー……合格！（^^）」

暁

「へ？ 何が合格？」

ルカ

「まどろっこしい事は嫌いだから単刀直入に言うわ、
あなた！ 私の代わりに【セカイ】を回ってくれない？」

暁

「はい？ セカイを廻るう？」

ルカ

「そのままの意味よ。あー、世界といっても他のセカイね。
私が行きたいのだけど、ここを離れるわけには行かないから
代わりに行ってくれる人を探していたのよ」

暁

「でも俺普通の何も能力もないどこにでもいる大学生ですよ？」

ルカ

「それなら大丈夫。私が魔改…ゲフンゲフン！！ 能力与えるから
！」

それを聞いて一瞬何をするのか怖かったが、

暁は、考えた。

アニメやゲームでしかない出来事が今日の前で現実起きている。

それに他のセカイも気になる。

…これは、行かなければ後悔する！

ルカ

「どう？」

暁

「えーと、俺でよければ・・・」

ルカ

「こんな事聞くのはおかしいけど、本当にいいの？」

暁

「はい、後で絶対後悔しそうなので」

ルカ

「そう… わかったわ、これではあなたは、私の代行者ね」

暁

「はい、それで質問が…… 色々セカイ廻るんですよね？ そのセカイの知識とかは？」

ルカ

「大丈夫、能力付与時に一緒に頭に入れてあげるわ。』

暁

「それならいいです。知識なしで行くのは、自殺行為ですからね」

ルカ

「あら、結構考えているのねあなた。じゃ、能力を上げるわ。何か要望はある？」

暁

「そうですね。まずは、身体能力向上と能力限界突破、毒物などの耐性。

後ありとあらゆる知識と魔力と氣両方無限状態で戦闘能力向上で」

ルカ

「ふむふむ、強さは、そのセカイで最強と同等。修業などしたらそれ以上に強くなるでいいのかしら？」

暁

『はい、それと出来れば、傷ついた時にその傷が回復したら一回り強くなるという感じで！

後、小説やアニメ特撮・ゲームとかの技や術を使えるようにして下さい！」

ルカ

「ええ、わかったわ」

暁

「要望は以上です。では、お願いします！」

ルカ

「今言われたやつと他のセカイの知識と後、何個か能力付き足しておくわね。

じゃ、能力を上げるわね」

そう言うと言を瞑り、何やら呟いている。

ルカ

「我^{わが}……力……かの者に……与えん……

・・・!!」

そういうと暁の全身が光に包まれた。

暁

「ッ・・・!!」

光が収まるのを待って、ルカは、口を開いた。

ルカ

「ふう、能力を付加したわ。後、あなたの容姿もサービスで変えさせてもらったわ」

ルカがそう言って指を鳴らすと大きな姿見が暁の前に出現した。

暁

「容姿……って 誰だ! このイケメンは!？」

姿見に映っているのは、髪型は金色長髪で、赤い瞳をした顔立ちがF○?のセ○イ○スみたいな長身痩躯のイケメンが立っていた。

ルカ

「誰ってあなたじゃない? どういい感じでしょ?」

暁

「これが俺だと!? ……マジかよ!？」

ルカ

「じゃ、さっそくで悪いんだけど、行ってもらえるかしら」

暁

「行くのはいいですが、一体どのセカイに行くんですか?」

ルカ

「あなたにいつてもらうのは、【真剣で私に恋しなさい!】のセカイね」

暁

「まじこいかゝ。わかりました」

ルカ

「では、ゲートを開くわね」

そういうと、暁の正面にゲートと呼ばれる魔法陣が出現した。

暁

「では、行ってきます」

ルカ

「はい、いつてらっしゃい」

そういつて、暁は、ゲートの中に消えていった・・・

ルカ

「・・・頑張ってね。■ ■ ■ ■」

暁には聞こえない声でルカは呟いた・・・

t o b e c o n t i n u e d

Prologue 『神の代行者』（後書き）

作者「ということで、始まりました。A・O・G（真剣で代行者に恋しなさい！）。とりあえず主人公カモン！！」

暁「呼んだか？駄作者」

作者「いきなり、駄作者かよ！！」

暁「本当に駄だろう。」

作者「それは、認める。」

暁「認めるのかよ！！」

作者「まあ、それはおいといて。」

暁「置いとくのかよ……。それはいいとして題名の『A・O・G』って 何の略？」

作者「AGENT OF GOD」

暁「まんまだな（～～；）」

作者「まんまです！」

暁「開き直るなよ（～～；）」

作者「とりあえず、暁の詳細なデータは、また次の回で掲載するか

ら。」

暁「じゃ、なんで呼んだ？」

作者「ひとりじゃさみしいから。」

暁「子供か！」

作者「ということで、次からまじこいの主要メンバーが出てきます。
では第1話でまたお会いしましょう。」

暁「じゃ〜な。」

閑話休題 オリジナルキャラ設定（前書き）

主人公やオリジナルキャラの設定などです。
オリキャラ増え次第随時追加していきます。

閑話休題 オリジナルキャラ設定

—主人公—

天錠てんじょう 暁あきら

性別…男

誕生日…10月2日

血液型…A型

身長…180.2cm

体重…68kg

性格…困ってる人を見過ごせないお人よしな性格 争いは好まないが、大切な物を傷つける者には容赦はしない。

体格…長身痩躯（程良く筋肉が付いている）

視力…左10.0／右10.0

趣味…料理 読書 鍛練 etc.（多趣味）

特技…全ヶ国語通訳 声帯模写

好きな物…鍋 努力している人 アニメ特撮 小説 ゲーム

嫌いな物…シソ 外道 上から目線で馬鹿にするやつ

尊敬する人…特になし。

見た目…F○?の○フィロス 髪の色と瞳の色が異なり金髪赤い瞳

CVイメージ…近藤 隆

アニメ特撮・小説・ゲームが好きないわゆるオタクな大学生。

神の使い稲葉を助けた事により。神のルーと出会い、ルーの提案でルーの代わりにセカイを回ることになった。

性格は、困った人を見過ごせないお人よしな性格。しかし、大切な者達に危機が迫ると鬼神の如く敵を殲滅する。

ちなみに家事はプロ級。

能力一覧

- ・身体能力向上
- ・能力限界突破
- ・怪我から回復すると一回り強くなる。
- ・アニメ特撮・小説・ゲームなどの必殺技や魔法が使える
- ・氣と魔力は無限状態
- ・イメージする事によって武器などが創りだせる。
- ・毒などの耐性
- ・どんな人や動物から好かれる性格
- ・ラブコメ体質
- ・スーパージョ
- ・ありとあらゆる知識を持っている。
- ・戦闘能力向上
- ・操縦能力は、神掛かり級

ーメインキャラクター

光の神 ルカⅡツヴァイトⅡルミナス

性別…女

誕生日…不明

血液型…不明

身長…156cm

体重…41kg

B…80 W…50 H…81

性格…サバサバしているが、実は結構甘えん坊。

体格…線の細いほっそりしている。

視力…測定不能

趣味…人間観察 ゲーム

好きな物…甘いもの全般

嫌いな物…辛いもの全般 外道

尊敬する人…父親

見た目…僕は友達が少ないの羽○川 子鳩 瞳は両方青。

CVイメージ…花澤 香菜

光の神。暁に神の代行者としての責務と能力を与えた人。

しゃべりは、結構サバサバしているが、結構甘えん坊で、寝るときには、クマのぬいぐるみが無いと寝れない

子供の一面を持っているが、普段は、結構まともなんで、ギャツプ萌えで部下からも愛されている。

父親と母親、それと一つ上の兄がいる。

冴場 涼香

性別…女

誕生日…5月7日

血液型…A型

身長…165cm

体重…53kg

B…95 W…53 H…89

性格…温厚穏やか 何事も臨機応変に対処する 茶目毛がある。

体格…抜群のプロポーションを持っている。

視力…左…2.0／右…2.0

趣味…読書 園芸

好きな物…天錠 暁 アールグレイ アップルパイ

嫌いな物…暁の敵になる者 外道

尊敬する人…天錠 暁

見た目…マケン姫っ！の二条 秋

CVイメージ…原田 ひとみ

天錠家に仕えるメイド長。年齢は、24歳。元は、凄腕のスイーパー。
1。

しかし、あるきっかけで暁を生涯の主とし、メイドになる。

性格は、温厚で人柄も良く穏やか。しかし、一度怒ると暁でも棘み
上がるほどの

迫力がある。密かに暁が好きだが、年齢の差もあり、打ち明けられ
ずにいる。

一サブキャラクター

神の使い 稲葉

性別…不明

誕生日…不明

血液型…不明

身長…100cm

体重…10kg

性格…しっかり者。結構のんき

体格…ウサギのぬいぐるみ大

視力…測定不能

趣味…ひなたぼっこ 料理

好きな物…にんじん

嫌いな物…とうがらし

尊敬する人…ルー（神）

見た目…西〇屋のロゴのウサギ

CVイメージ…加藤 英美里

ルーの従者。見た目はウサギみたいな感じ。

性格は、結構しっかり者で頼まれた仕事はすぐ片付ける。

しかし結構のんきな為ひなたぼっことかボーとすることが大好き。

暁の事は命の恩人として気にいっている。

ちなみにこの姿は、仮の姿らしい。

閑話休題 オリジナルキャラ設定（後書き）

作者「これから随時増えていきます。」

暁「一応、真面目に俺の設定作ってたんだな。」

作者「作らないと何かと心配ですよい」

ルー「私もあるのね。」

稲葉「私もありますよ！」

作者「二人とも呼んでないのに来たのか。」

ルー「あら、来ちゃ悪いの。（鋭い眼光）」

作者「いえ、悪くありません。」

暁「作者カッコ悪いな」

作者「だまれーい、あの人怒らせるとシャレにならん。」

暁「まあ神だしな。」

作者「こほん、では気を取り直して次は本当に第1話です。ではノ」

3人「またね」×3

第1話 『風間ファミリー誕生』（前書き）

ということで、風間ファミリーの面々が出てきますよ。

※11／22 加筆修正致しました。

第1話 『風間ファミリー誕生』

なんで、こうなった？

それというのも俺……！ 子供になってるやん（@Д@；）！！

どういう事だぁ……！！！！

ルカ

「（おゝい、アキラゝ）」

暁

「（頭にルカの声が………これは………念話か？）」

ルカ

「（正解よ！）」

暁

「（それは、それとしてなんで俺小学生なってるんだよ？）」

ルカ

「（今からその説明するから静かに聞いていてね。あなたには、この世界の主要人物に接触してもらおうわ！）」

暁

「（主要人物？ あぁ！ 風間ファミリーの面々か？）」

ルカ

「（そうよ。そして、彼らと行動を共にしなさい。それ以外は、特

にないもないから自由に行動していいわよ?」

暁

「(自由に……ねえ)」

なら、俺の行動は決まっている。風間ファミリーの閉鎖的な感じと小雪達を救う事。

今の俺ならできるかもしれない。

なぜ、そうしようと思ったかというまじこいはプレイしてや
はりその事が気になったからだ。

元々、人を不幸にしようというのは正に合わないし、俺はハッピー
エンドが大好きなんだ。

それに他にも救える人がいるはずだ。

暁

「(わかった。それ以外にやることは?)」

ルカ

「(あとは、その世界に存在しない人物や化け物いたら、話ができ
るなら話し合いを

話ができないならば殲滅をして頂戴)」

暁

「(殲滅って……… たしか、世界が不安定になるからだっ
け?)」

ルカ

「(ご明察。一応その事も知識として入れといてよかったわ)」

暁

「（とりあえず・・・・・・・・了解だ。あ、それと・・・・・・・・）」

ルカ

「（何？）」

暁

「（元いたセカイでは俺の存在はどうなったんだ？）」

ルカ

『（存在して無かった事になってるわ、でも、元いたセカイに戻れば元通りになるわ。）』

暁

「（そうか・・・・・・・・よかった）」

ルカ

「（安心した？）」

暁

「（ああ、やはり自分が生まれたセカイだからな）」

ルカ

「（じゃ、一旦、念話斬るわね）」

暁

「（ああ、またな！）」

ルカ

「（ええ、またね）」

そう言って念話が切れた。

暁

「さてっと、がんばりますか」

そう言って、用意された家に帰った。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

俺のこのセカイの役は、大企業の御曹司らしい。

しかも、この世界で3本の指に入る大企業だそうだ。

両親と兄貴は、今LAに居る。

俺だけ、日本に残った。

世話係として、話の分かるメイド長の冴場さえば 涼香さんりょうか含む

10人のメイドが俺に使えてくれている。

やはり両親と離れるのは悲しいが、彼女たちのおかげでそんなにさ
みしくはなかった。

暁

「涼香さん　ちょっと遊びに出てくるね」

涼香

「お一人ですか？　最近物騒になってますし。護衛の者をお付け
しましょうか？」

暁

「いや、大丈夫だよ。それは涼香さんも知ってるでしょ？」

涼香さんは、俺の力を知っている。なので、そこまで心配していない。

涼香

「フフ、そうですね。暁様の心配より相手のほうが心配ですよ（～
～；）」

暁

「ハハ、じゃ、いってきます！」

涼香

「行ってらっしゃいませ」

そう言って見送りをしてくれた。

屋敷を出ると

暁

「さて、風間ファミリーの面々と接触しますか」

俺は目的地の空き地に向かった。

空き地に着くと案の定目標のダンボールハウスを発見した。

一応、ドアの隙間から中を覗いた。すると中には、バンダナの少年が何かしている。

暁

「（あれがキャップか）声をかけてみるか？」

そう思いながらドアを開けた。

翔一

「誰だ！」

暁

「ごめんよく 原っぱ来たらちようどこのダンボールハウスが目に入ったから。」

これって一人で作ったの？」

翔一

「ああ、一人で作った！ それとこれは、【風雲風間城2号】だ！」

暁

「2号？ 1号は？」

翔一

「作った次の日に行ったら知らないおっさんが住んでたからあきらめた」

暁

「なるほどね）にしても所々やばい箇所があるな）」

翔一

「なんだと！ 俺の作ったのにケチをつけるのか！」

翔一は、怒っていた。

暁

「怒ったなら、謝るよ。俺ならこの城をもっと頑丈にできるよ」

翔一

「本当か！どうやるんだ？」

暁

「ああ、それはね……」

それから俺たちは、風間城の補強案について大いに語り合った。

翔一

「おまえ、いろんな事知ってるな、友達になってくれないか？
俺この町に来たばかりだから友達いないんだ」

暁

「俺でよければ、喜んで。俺の名前は、天錠 暁だ」

翔一

「アキラだな。俺の名前は風間 翔一ってんだ！」

暁

「ならショウだな！ よろしくな！」

翔一

「ああ！」

そういつて、握手を交わした。

それからいろんな話をした。ショウは、親父さんと旅から旅の生活を送っていたそうだ。

で、ショウの親父さんが、そろそろ腰を下ろすことになり、この町に引っ越してきたのだ。

翔一

「おまえ、天錠グループの総帥の子供なのか。すごいな！」

暁

「凄いのは、父さんのほうさ、俺が偉いわけじゃない」

翔一

「じゃ、将来親父さんの会社継ぐのか？」

暁

「いや、うちの兄貴が会社継ぐから俺は継がないよ」

翔一

「そうなのか、じゃ、大人になったら旅にいかねえーか？」

暁

「ははは！それもいいな。考えておくよ」

翔一

「楽しみだぜ！」

暁

「ああ！」

そう話していると外に誰かがいる気配を察知した。

暁

「（俺達と同じくらいの少年か。ということは大和か！）」

暁

「誰か外にいるみたいだ」

翔一

「誰だろ？ 出てみるか？」

暁

「ああ」

二人が外に出るとそこには、荷物を持ったニヒルな感じの少年が立っていた。

少年の名前は、直江 大和

話を聞くとどうやら家出をしてきたらしい。

大和

「俺は、母親がうるさいから家出したんだ。
しかし、俺は冷静な子供だ。
あまり遠くに行く俺の経歴に傷が付く」

暁

「お前、アホだろ？」

大和

「アホとはなんだ！」

あほと言われ、大和は怒っている。

暁

「アホはアホだ。冷静ならそんな事はしねえよ。

それに家出ならもっと遠くに行け。

母親に探してほしいのが丸わかりだ」

大和

「ぐっ・・・」

大和は、凶星を言われ黙った。

暁

「お前、人生は、死ぬまでの暇つぶしとか考えてねえよな？」

大和

『実際そうだろ？』

暁

「だから、お前はアホなのだ！ そんなこと考えてたら、人生かなり損するぞ」

大和

「何？」

暁

「いいか！・・・」

暁は、大和に人生とか色々説き伏せた。

すると大和の顔がニヒルな感じから打ちひしがれた感じに変化していき、OTL状態になっている。

大和

「た、たしかにお前の言うとおりだ。
俺はなんてアホみたいなことを言ってたんだ。
これじゃまるでかなり痛い人じゃないか」

暁

「まあ、それが分かっただけでもいいんじゃないか？
今ならまだ間に合うしな！」

大和

「お前、名前は？」

暁

「俺の名前は、天錠 暁」

翔一

「俺は、風間 翔一だ！」

大和

「ショウイチかゝ 俺と友達になってくれないか？」

翔一

「ああ、お前面白いからいいぜ！」

大和

「それとアキラ・・・・・・・・俺をお前の弟子にしてくれ！」

暁

「弟子！？　なんでまた？」

大和

「お前は、俺の知らない知識をたくさん持っている。
それにお前が師匠なら俺の夢に近付ける気がする。」

暁

「夢？　どんな夢だ？」

大和

「総理大臣になってこの日本を変えたいんだ！」

暁

「へえー、これまた大きな夢だなー　半端な道のりじゃないぞ？」

大和

「覚悟してる。険しい道だと思うけど、どうしても俺はその夢をかなえたい！」

暁

「そうか・・・・・・・・わかった。俺の弟子にしてやるよ」

大和

「ほ、本当か！　ありがとうございます。アキラ：いや師匠！」

なんか大和がうれしそうにそう言った。

俺は半ば呆れながら、

暁

「…はは。よろしくな！ 大和」

こうして、その日俺は、友達と弟子の両方を手に入れたのだった。

それから、引っ越してきたワン子事、岡本 一子（のちの川神 一子）と

島津 岳人と師岡 卓也が仲間に加わり、こうして

【風間ファミリー】が結成されたのだった。

t o b e c o n t i n u e d

第1話 『風間ファミリー誕生』（後書き）

作者「ということで、思い切り原作をプチブレイクしました。」

暁「なんか大和が弟子になったぞ？」

作者「元々、私は大和そんなに好きじゃありません。なので、あの少年時代の厨二病な性格を壊して、まともな道に戻すため、あえてこんな感じにしました。」

暁「そこまで考えてたのか、見直したぜ。」

作者「見直したって・・・お前私をいまままでどう思ってたの？」

暁「言って欲しいか？」

作者「いえ、ごめんなさい、言わないでください。すんませんでした。」

暁「まあこの駄作者いじりはこれくらいにして、なんかワン子達の加入が思い切り

やっつけ感否めないんだけど（～|～;）」

作者「んーそこまで盛り上がらないからなー。まあ次の話は

あの人が出てくるから少しバトルあります。」

暁「あんまり戦いたくないけどな。」

作者「そう言わずに（—|—;）」

暁「はあゝ、わかったからそんな顔するなよ。」

作者「わかってくれたなそれでいい！」

暁「なんか釈然としないな。」

作者「では、次回第2話『百代との出会い』でお会いしましょう。」

暁「はあゝ、本当、めんどくさいわ。」

第2話 『百代との出会い』 (前書き)

という事で、まじこいメインヒロインの一人川神 百代登場です！

※11／22 加筆修正しました。

※11／23 微修正しました。

第2話 『百代との出会い』

風間ファミリー結成から数日がたったある日の事

同じ学校の上級生のグループが、俺が松笠に行ってる間に

俺達の秘密基地を奪おうと喧嘩を売ってきた。

なんとか追い払ったものの秘密基地は壊されてしまった。

翔一

「ちくしょう！ あいつら秘密基地壊しやがって！」

悔しそうに怒っている。

岳人

「まったくだぜ！ にしても人数が多すぎる！」

大和

「仕方がないよ、師匠がいたらあんなやつら倒せたけど、今、松笠に行ってるし（――；）」

卓也

「たしかにアキラいるとすぐ決着付きそうだけど（～～；）」

一子

「ねえ、キャップこれからどうするの？」

翔一

「大和、なんか策ねえか？」

大和

「んー、そうだな。助っ人頼むか」

一子

「助っ人？」

岳人

「大和く、なんか当てがあるのか？」

大和

「ああ、川神院って知ってるか？」

卓也

「武術の総本山でしょ？ 川神の人なら知らないはずはないよ。それがどうしたの？」

大和

「その総代の孫が俺たちの学校の上級生なんだ。名前はたしか川神 百代」

翔一

「たしかにそいつが助っ人してくれたら、鬼に金棒だな！」

大和

「助っ人の件は、俺が行ってくるよ」

岳人

『おう、任せたぜ！ 大和！』

とりあえず、川神 百代をする事に決定した。

そんなやりとりを遠くからじいーと見つめる少女が一人、

京

「……………いいなあ、楽しそう…」

少女の名前は、椎名 京

後に風間ファミリーの一員になるのだが、それはまた別のお話……………

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

所変わってここは、川神院

武術の総本山にして、武の頂点。

多くの武術家が、今日も武の境地を目指して鍛練を続けている。

百代

「さてと、今日も走り込み行くか」

そうやる気がない口調で山門を出ると一人の少年が門の前に立っていた。

大和

「すいません、ここに川神 百代って人いますか？」

百代

「川神 百代は、私だが？」

大和

「いきなりで悪いのですが、力を貸していただだけませんか？」
そう言って、大和は頭を下げた。

百代

「ここではなんだ、近くの川原で話を聞こうか？」

大和

「はい」

そう言って、二人は、多馬川の川原に移動した。

川原に到着すると大和は、百代に助っ人の依頼をした。

百代

「それは、ゆるせないな、私は卑怯なやつや不誠実なやつが大嫌いだ。」

でも、何か見返りがないと私は手を貸さないぞ？」

大和

「では、報酬としてこれを」

そう言って差し出したのは、百代が集めている野球カードのレアカードだった。

百代は、上機嫌でこれを受け取り、

百代

「後、こっちからお前に条件がある。おまえ、私の舎弟になれ！」

大和

『舎弟ですか（～|～；）…………あの拒否権は…？』

百代

「拒否した場合は、助っ人の件は無しだ。』

大和

「わ、わかりました、あなたの舎弟になります」

その答えを聞くと百代は嬉しそうに

百代

『そうか！ 今日からお前は私の義兄弟だ！ よろしくな大和！』

大和

「よろしくお願いします！ 姉さん」

そういつて、握手を交わした。

百代

「あ、そうそうもし契約を破ったらお前を捌り殺すからな。何度も言うが、私は不誠実なやつは嫌いだ！」

鋭い眼光で大和を見る。

大和

「は、はい………」

このとき、大和は心底後悔したというOTL

とりあえず合掌

チーーン！

☆★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆

数日後、また例の上級生のグループが風間ファミリーに難癖付けてきたが、

百代によって一瞬にして数人の上級生達は、倒されていった。

上級生A

「い、痛いよ」

上級生B

「う、腕が！！」

上級生C

「こ、こいつ強え！！」

上級生D

「止めろ、止めろよ」

百代

「命乞いは見苦しいぞ！」

百代は、殺気を放ちながら心底楽しそうに喜んでいる。

上級生リーダー

「俺は本当の悪だ。子猫や子犬でも平気で殺せる。お前も殺してやるぜ！」

しかし、両足が震えているので、ただのハッターだとすぐわかる。

百代

「悪ね、へえ、素敵だなあ先輩。デートしてくれ！」

大和

「あ、キレた」

翔一

「キレたなあ」

一子

「百代お姉ちゃん、怒ってる！」

岳人

「俺、知らねっと！」

卓也

「あーなったらもう止められないね」

風間ファミリーの面々は、完全に傍観者になっていた。

百代

「先輩、あそこの3階の屋根まで付き合ってくれ」
（^| ^メ）
」

そういつて、近くの建物を指さし、上級生リーダーの足を持って、その建物の屋根に一瞬にして

飛び上がった。

風間ファミリー

「ま、まさか・・・！！?」

百代は、足を持ってる相手を地面にそのまま足で着地できるように空気投げで投げ飛ばしそのまま落した。

しかし、予想もできない事が起きた。

?

「おいおい、ここまでやる必要はないだろう」

そう言った少年は、落下している上級生リーダーを瞬時に助けた。

百代 side

大和の約束の通り、私は、風間ファミリーの助っ人になった。

ファミリーの面々は、結構いいやつが多く私もこいつらが好きになった。

そんなある日、同じ学校のアホな上級生たちが私たちに難癖付けて

きた。

それで、上級生の一人が、メンバーの一子を殴った。

その瞬間、私は怒った。

私の仲間に今何をした？

これは許せることではない。

とりあえず、向こうからやってきたんだ。

こちらのせいじゃない。

私の仲間に手を上げたんだ。

お前達覚悟はできているんだろうな。

私は、そいつらの腕の骨を外していった。

上級生リーダー

「俺は本当の悪だ。子猫や子犬でも平気で殺せる。お前も同じ様に殺してやるぜ！」

こいつは馬鹿か？ そんなハツタリ私に効くか！

とりあえず、こいつはあの建物屋根から落そう。

そうしよう。

ただそのまま落してもおもしろくないので、

両足で着地できるように落すか。

百代

「先輩、あそこの3階の屋根まで付き合ってくれ」（^| ^メ）」

そういつて、近くの建物を指さし、上級生リーダーの足を持って、その建物の屋根に一瞬にして

飛び上がった。そして、躊躇なくそのバカを落した。

しかし、予期せぬ事が起こった。

？

『おいおい、ここまでやる必要はないだろう』

なんだこいつは？

私が助けたのを見えなかっただど？

百代は、ただただ驚いていたが、やがて獰猛な笑みを浮かべた。

おもしろい！

こいつはおもしろいぞ！たぶん実力は私より遥かに上だ！

こんなやつが近くにいたとは！？

しかも歳は、私と同じくらいか。本当に面白い！

百代の興味は、その助けた少年に行き、いままでやっていた上級生の事など

すでに眼中になかった。

百代 side out

一子

「ねえ、あれって……アキラじゃない？」

大和

「ああ、間違いない、師匠だ」

翔一

「おお！ 本当だ！」

岳人

「でも助かったぜ」

卓也

「本当だね、僕たちじゃ止められなかったしね」

メンバーは安堵の表情を浮かべそう言った。

百代

「おい、そこのおまえ！ 何者だ？」

暁

「俺は、天錠 暁 風間ファミリーのメンバーだ！」

百代

「そうか、おまえがあの…… 私は、川神 百代だ！」

この眼光が鋭い女の子は…… ああ、そうか、こいつが川神 百代か。

暁

「とりあえず、その前に……」

そう言って、上級生グループを鋭い眼光でにらむ。

上級生グループ

「ひい！！！！！！」

暁

「先輩方、この前忠告したのよな？ ちょっとかいかけるな！ っ」と

暁は、軽く殺気を放ち言った。

上級生グループ

「す、すみませんでした > ((<」

上級生たちは、おもいきり暁に土下座した。

暁

「もう二度とちよっかいかけってくるな、

もし、またしたら…… わかってるかな？」

上級生グループ

「はい、もうちょっかいかけてません!!!」

暁

「さて……………」

暁は、腕の関節が外れている上級生たちを関節をはめ直して行った。

ゴキッ！　ゴキッ！

上級生グループ

「ギャ~~~~~!!!!!!」

上級生達の断末魔がこだました。

〽数分後〽

上級生たちは、一目散に逃げ出した。

暁

「ふう、やっと終わったな」

そう言って、暁が一息ついていると

百代

「おい、おまえ！　私と勝負しろ！」

暁

「いいよ。ここじゃなんだし、お前のとこでいいか？」

百代

「ああ、いいとも！」

大和

「師匠、あっさり勝負受けたね」

翔一

「そりゃ負けないからなあいつ」

一子

「アキラ強いものね！」

岳人

「ああ、あいつが負けたとこみたことがねえしな」

卓也

「そうだね」

そう話ながら、風間ファミリーの面々は川神院に移動した。

☆★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

百代

「じじイ！ いるか？」

そう呼ぶと立派な髭を蓄えた老人が奥の間からでてきた。

鉄心

「なんじゃい、百代騒々しい」

百代

「こいつと手合わせしたいんだ。審判してくれ」

鉄心

「ん？ どの子じゃ？」

暁

「俺です。はじめまして、天錠 暁と申します。川神 鉄心殿」
そう言って、頭を下げた。

鉄心

「鉄爺でよい、お主、なにか武術をしておるのか？」

暁

「はい、我流ですが……………」

鉄心

「ふむ……………」

鉄心は、暁をじーと観察するように見ている。

実力は百代より上か。しかも相当な武を持つておる。

これは、百代にいい相手ができたわい。

鉄心

「ふむ、よかろう」 修練場で手合わせを行おうかのう」

百代

「本当か！　いくぞアキラ！」

暁

「ああ！」

そういつて、鉄心を加えた風目ファミリーの面々は修練場に移動した。

修練場では、師範代の釈迦堂　刑部とルー・イーが、門下生と修練していた。

鉄心

「釈迦堂とルーこっちにきてくれ」

二人は、鉄心の元にやってきた。

釈迦堂

「総代、何か用ですかい？」

鉄心

「今から百代とそっちにおる少年の手合わせするんで、
門下生達の修練を一時やめてもらえんか？」

ルー

「ハイ、ワカリました。ミンナ、一時修練中断ネ」

そう言うのと門下生達は、端のほうに移動した。

鉄心

「すまんのう、百代、アキラ君と言ったか中央へ」

そう言う二人は、中央で相對する。

鉄心

「では、これより手合わせをはじめる。東方！ 川神 百代！」

百代

「ああ！」

鉄心

「西方！ 天錠 暁！」

暁

「はい！」

鉄心

「それでは、はじめい！！！」

百代

「ハアアアアア~~~~！！！」

先に動いたのは、百代だった。

百代の銃の弾丸より早く鋭い複数の突きが、

暁を仕留めようと狙ってくる。

しかし、暁は、最小限の動きでその鋭く早い複数の突きをなんなく
躲す。

百代

「チィ！！！！！」

百代は、舌打ちすると攻撃を蹴り主体に変えてきた。

百代

「ウラァウラァウラァウラァ!!」

連続の蹴りが暁を襲う。しかしまたしてもなんとなく躲し、

突き出された百代の足を掴みそのまま

暁

「ふん!!」

ドガあ!!!!!!

地面に叩きつけた!!

百代

「グハあ!!!!」

暁

「まだまだ終わりじゃないだろ？」

百代は、一瞬にして体勢を整え構える。

百代

「ああ!!」

暁

「ハッハ!そうこなくっちゃな!」

暁は、そう言うとうれしそうに笑いながら言った。

二人の戦いはまだ始まったばかり・・・

t o b e c o n t i n u e d

第2話 『百代との出会い』 (後書き)

作者「ノリノリだね、暁。前回めんどくさいって言ってた割には・・・」

暁「やってみたら意外に楽しかった。」

作者「まあ、いいけどね。」

暁「そういえば、チヨロッと京でてきたね。」

作者「ちよつと出したかったしね。でも本格的に出てくるのは、3話くらい後です。」

暁「そうなんだ。」

作者「それまで連続でバトルが続きます。」

暁「もしかして・・・。」

作者「たぶん考えている通りかと・・・」

暁「はあー、俺にはのんびりする時間はないのか・・・。」

作者「あ、そうそうオリキャラ情報更新します。」

暁「ああ、涼香さんか。」

作者「そそ。では次回第3話 『決着、そして・・・』でお会いし

ましよう！」

暁「ではまたな！」

第3話 『決着、そして・・・』 (前書き)

暁VS百代の続きからどうぞ

※11／22 加筆修正しました。

11／23 微修正しました。

百代の掌から無数の気弾が飛んでいく。それはさながら本当に蛍の様だった。

暁

「はぁー！ー！！！！」

しかし、暁は、回し蹴りで全ての気弾を打ち落とした。

百代

「そいつは、オトリだ！！　喰らえ！川神流・無双正拳突き！！！！」

ドゴーン！！！！！！

気を纏った鋭く重い正拳突きが、暁の身体に突きささる！！

百代

「どうだ！！　な、何っ！？」

たしかに無双正拳突きが暁にヒットした。

しかし、その突きは、暁の掌でガードされている。

暁

「なるほどな、その歳でこの威力か。うんじゃ俺も少し本気を出すよ」

そう言った瞬間、百代の背筋にゾクつとした。

まるで首筋に死神の鎌が当てられてるような感覚。

やられる！　と思った百代は、一旦後方に飛び退き、また構えた。

暁

「うんじゃ、いくぞ！」

その瞬間、暁の髪と瞳が変化した。髪の色は金色。瞳は赤に。

百代

「なっ!？」

百代は驚いている。

説明しよう！

普段は、髪と瞳は、黒になっている。さすがに金髪赤い瞳だと目立つので、

一応ルカがそうなるようにしてくれらのだ！

百代が一瞬隙を見たのを暁は、見逃さなかった。

暁

「機神拳無双奥義・真　覇　隴　撃　烈　破!！」

両手から龍の形をした気弾を百代に連続に当て、

百代の身体を上空に押し上げた

百代

「ぐっ!！」

そういつて微笑んだ。

鉄心

「百代、どうだったかの？」

百代

「世界は広いなく、じじい。また今より強くなってアキラに挑戦する！」

そう元気に答えた。

百代がこんなにすっきりした顔するとはのう

本当にありがとう、暁君

お主のおかげで百代は、また一回り心が成長した。

鉄心は、心の底から暁に感謝した。

釈迦堂 s i d e

まさか百代に勝っちまうとはよく

面白い餓鬼だな

俺もいっちょ戦いたくなつたぜ！

釈迦堂は、獰猛な笑みを浮かべた。

釈迦堂 side out

ルー side

百代、良かったネ

本当の強敵（きんぐ）に出会えテ

にしてもアノ武術ハ一体？

ルー side out

暁

「さて、鉄心殿お願いがあります。

そこにいる師範代二人と勝負させてもらえませんか？」

鉄心達川神院全員が驚いた！？

鉄心

「な、なんじゃと！？」

暁

「今は言えませんがこの勝負が終わったら理由をお教えします」

暁は、真剣な表情でそう答えた。

鉄心

「何か理由があるんじゃない？ 良かろう、釈迦堂とルー、この子と
仕合なさい」

ルー

「総代お言葉ですが、その子は、まだ子供ですよ？　もしものときだってあります！」

釈迦堂

「ルー、じゃ、おまえはそこで見てな！それにその餓鬼は、普通の子供じゃない。」

俺たちと同じ武術家だ！」

そう言って、ルーを睨んだ。

ルー

「しかし………」

ルーは、迷っている。

暁

「御心遣い感謝しますが、遠慮なんてしないでください。
ここから先は、武と武の真剣勝負です。
それにそれは俺に対する侮辱ですよ」

ルー

「！」

ルーは悟った。

この子は覚悟ができています。

ならばそれに対して、

子供だからといった理由で勝負をしない事は、

失礼にあたる。

ルー

「分かったヨ。ならばお相手しよう！」

ルーの細い目は、見開かれ本気という感じすぐ伝わった。

鉄心

「では、どちらからいくかの？」

釈迦堂

「俺から行くぜ！」

そう言って、釈迦堂が修練場の端から一気に中央へやってきた。

ちなみに百代は、風間ファミリー側に横に置いてきた。

暁

「では、よろしく願いします」

釈迦堂

「ああ、よろしくな！」

そう言うってお互い礼をした。

鉄心

「それでは、仕合を始める！ 東方！ 釈迦堂 刑部！」

釈迦堂

「オウ！」

鉄心

「西方！天錠 暁！」

暁

「はい！」

鉄心

「それでは、はじめい！！」

そして釈迦堂と暁の死合が、始まった！！

b e c o n t i n u e d

t
o

第3話 『決着、そして・・・』 (後書き)

作者「圧勝だったね。」

暁「まあな、百代は、まだそんなに強くないし。」

作者「まあね、瞬間回復能力あったらやばかったと思ったけど・・・」。

暁「まあ骨は折れるけど負けないよ俺？」

作者「まあ、それは置いという。」

暁「置いとくなよ（――；）」

作者「次は、釈迦堂さんとの死合だね。」

暁「一瞬誤字だと思ったらたしかにそうなるだろうな。」

作者「それはそうと暁が使った技の説明をば。」

技名

機神拳無双奥義・真霸隴撃烈破

無数の龍の形をした気弾を連続で撃ち込み相手を上空へと押しやり、無防備な相手に気を纏った脚で飛び蹴りをする機神拳の機神拳無双奥義。

登場作品…無限のフロンティアEXCEED

主人公アレディ・ナーシュの必殺技。

作者「いやー、やっぱこれでしょう。」

暁「たしかにこういう系統には、合いそうな技だな。」

作者「という事で、次回、第4話 『釈迦堂 刑部』でお会いしましょう！」

暁『うんじゃなく。』

第4話 『釈迦堂 刑部』 (前書き)

という事で、川神院での戦いはまだまだ続きます！

※11／22 加筆修正しました。

11／23 一部修正しました。

第4話 『釈迦堂 刑部』

その少年は、孤独だった。

少年は、天才であるがゆえ、周りから嫉み・疎まれた。

少年は、どんどん孤独になり、性格も歪んで行った。

歳月が過ぎ、少年から青年になることには、暴力の日々を過ごしていた。

そんなある日、青年は、川神 鉄心に出会った。それが運命の出会いだった。

青年は、川神院の門弟になり、凄まじき速さで川神流を習得し、師範代にまでなった。

しかし、そこでも青年は、孤独だった。

力を追い求めるがゆえ、彼は、戦い続ける修羅の道のスタート地点に立っていたのだ。

その青年の名は： 【釈迦堂 刑部】

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

鉄心

「それでは、仕合を始める！ 東方！ 釈迦堂 刑部！！」

釈迦堂

「オウ！」

鉄心

「西方！ 天錠 暁！」

暁

「はい！」

鉄心

「それでは、はじめい！！！」

鉄心から開始の合図があったが、二人は、構えたまま動かなかった。

5分経過……先に動いたのは、釈迦堂だった。

釈迦堂

「そっちがこないなら！こっちからいくぜ！」

そういつて、釈迦堂は、大地を蹴って、一瞬にして暁の間合いを詰めた。

暁

『（速い！）』

釈迦堂

『オラ！！オラ！！オラ！！！！』

常人では視る事が出来ない光の速さ並の鋭く重い突きが、暁を襲う！

暁

『ちィ！！！』

暁は、その突きに臆することなく迎撃していく。

釈迦堂

「ハハハ！！！！なかなかやるじゃねーか！　ならこれでどうだ。川神流・星殺し！！！！」

黒く渦々しい闘気を纏った拳から放たれた一撃が暁に直撃し、後方に吹っ飛ばされる！

暁

「ぐっ！！！！」

すぐ様、体制を整えるが、もう目の前に釈迦堂が距離を詰めていた。

釈迦堂

「遅せえ！！　川神流・大蠍撃ち！！！！」

サソリのしっぽを連想させる構えの破壊力突きが、暁の腹に突きささる！

暁

「ぐはあ！！！！」

暁は、地面に倒れた。

釈迦堂

「もう終わりか？　偉そうな事言ってた癖によゝ
この程度かゝ　もう少し楽しめると思ってたんだがなゝ」

釈迦堂は、地面に倒れている暁にそう落胆したような感じで言った。

風間ファミリーside

百代

「相変わらず、釈迦堂さん、容赦ないな（――；）」

一子

「アキラ！！！！」

大和

「ワン子落ち付けって、師匠が負けるわけないだろ？」

翔一

「ああ、そうだな！」

岳人

「で、でもよゝ。動かねえーぞゝ！」

卓也

「大丈夫かなゝアキラ」

百代

「あれだけ決まればまず動けないだろう」

翔一・大和・一子・岳人・卓也

「そんな」×5

それを聞いて5人は、真剣で心配になったが、
信じられない事が起こった。

暁

「い、痛ってえ」

そう言って、今の体制からバク転をし、すぐ様構えた。

釈迦堂

「なっ!!」

暁

「やっぱり、川神院だけあって強いや」

釈迦堂

『おいおい、まじかよ、あんまりダメーじゃないだど!?!』

全員

「ええええええ!!」

全員驚いた。

暁は、片腕をぐるぐると回しながら、

暁

「さて〜と、さっきよりもうちよつと本気出そうかな」

釈迦堂

「何っ？ もうちょっと本気だと!!」

風間ファミリーside out

暁

「さて〜と、さっきよりもうちょっと本気出そうかな〜」

今なんて言った？

ふざけるな！

ここまでこけにされたのは、はじめてだ！

こいつは、殺す！

絶対殺す！

釈迦堂から禍々しい氣が全身から放たれる!!

釈迦堂

「おい！ 餓鬼!! 調子に乗らせて置けばいい氣になりやがって!!」

暁

「釈迦堂さん、あんた負けた事無いでしょ？

あんたは一度負けたほうがいいよ!」

その瞬間、暁の氣が一気に膨れ上がった。

百代

「なっ!!」

鉄心

「なんじゃと!!」

ルー

「ナント!!」

釈迦堂

『なっ……!!』

川神院全員が驚いている。

暁の氣は、釈迦堂の禍々しい氣より遥かに大きかった。

おいおい、シャレになんねえぞ!!

この力は、まるで総代級の氣じゃねーか…

あの氣に比べれば俺の氣なんてカスに等しいじゃねーか…

あの餓鬼トンデモねえ…

しかし、この氣はなんだ？

人が出せる氣じゃねーぞ。

どっちかと言えば神とかそいった類の神聖さのある氣だ…

今更ながら、釈迦堂は後悔した。

自分は、天才だと思っていたが、

この少年に比べれば自分は凡人。

俺は、なんて勘違いをしていたのだろう。

正に自分は、井の中の蛙だったのだ。

釈迦堂が呆然としてしていると目の前の暁の姿が、一瞬にして消えた。

釈迦堂

「なっ!!! どこいっ!!!!!!!!」

もう目の前に暁がいた。

暁

「荒れ狂う殺劇の宴! 殺劇舞荒拳!!!!」

釈迦堂にまるで踊りを踊ってるかの如く

最初は、

下段回し蹴り↓パンチ↓蹴り↓掌底破↓飛燕連脚↓飛び込み蹴り
↓アップパー↓サマーソルト↓アップパーの順番で

釈迦堂に撃ち込む!!

暁

「ウラララララララララあ!!!!!!!!!!!!!!」

ゴスッ ドゴン バキ ボキ ドキ!!

釈迦堂

「へぶ・・・・・・・・ごふ・・・・・・・・あふ!!!!!!」

釈迦堂は、まるでサンドバックの如く殴られ蹴られまくった。

暁

「これで最後だ!!」

そういつて、釈迦堂のアゴ目掛けてアッパーカットが炸裂した。

釈迦堂

「ぐはぁ!!!!」

釈迦堂は、天空に上げられそのまま受身を取れずに地面に叩きつけられた。

鉄心

「釈迦堂!!!!!!」

釈迦堂は、地面に横たわったまま動かなかった。

釈迦堂

「・・・・・・・・」

どうやら気を失っているようだ。

鉄心

「ほっ！」

鉄心は安堵の息を吐いた。

鉄心

「それまでい！ 勝者！ 天錠 暁！」

川神院門弟たちは、驚きを隠せなかった。

百代

「アキラが勝った…のか、まじか…まさか釈迦堂さんに倒すとは…」

百代は驚いていた。

たしかに私より遥かに強いとは知っていたが、

まさか釈迦堂さんを倒すとは…

あいつの本当の実力は一体…

ただただ呆然とするのだった。

それを横目に風間ファミリーのメンバーは、暁の勝利を沸いたのだった。

t o b e c o n t i n u e d ……

第4話 『釈迦堂 刑部』(後書き)

作者「ということで、いかがでしたでしょうか？」

百代「釈迦堂さんに勝っちゃったよ(――;)」

作者「たしかにアイツどこまで強いんだろうね(――;)」

百代「いや、おまえが驚いちゃダメだろ!!」

作者「てへっ♪」

百代「きしよいわ!川神流・雪だるま」

カチーン

作者「つ、つべた・・・い」

パリーン

作者「冷たいわ!!」

百代「何っ!あれを破っただと・・・」

作者「作者なめんな!」

暁「一体何してるんだか・・・(――;)」

作者「それはそれとして、今回使った技の説明タイム!」

技名

殺劇舞荒拳

拳や蹴りなどで敵を攻撃する乱舞技

登場作品…テイルズシリーズ

作者「いや、使ってみたかった技です。」

暁「たしかに違和感ないよな、この技。」

百代「私が覚えてたら使えそうだし。」

作者「うんうん。さてとそろそろ。」

次回、第5話 『伝えたかった事』でまたお会いしましょう。

」

暁・百代「では、またなあ」×2

第5話 『伝えたかった事』 (前書き)

次は、ルー師範代戦と思いきや……………

※11／22 加筆修正しました。

11／23 微修正しました。

第5話 『伝えたかった事』

暁 VS 釈迦堂は、

暁の圧倒的な戦闘力の前に釈迦堂はなすすべなく倒された。

それから30分後

暁

「これでよしっと！」

暁は、釈迦堂と百代に治癒功ちゆこうを使い、傷を治した。

百代

「これは、内氣功か？ 一瞬で傷が癒えたぞ！」

百代は興奮しながらそう言った。

暁

「ああ、その通りだ。俺は、治癒巧と呼んでいる。」

鉄心

「ほっほっほ、その歳で、氣を自在に扱えるとは、本当に末恐ろしいのう」

暁

「いえいえ、まだまだです」

そういつて、暁は謙遜した。

鉄心

「ほっほっほ、謙遜せんでいいわい」

そうやって、鉄心達と話していると釈迦堂が目を覚ました。

釈迦堂

「っ……俺は……。そうか、敗けたのか……」

ルー

「ああ」

釈迦堂

「俺は、今まで自分を天才だと思っていたが、間違いだったんだな」

ルー

「釈迦堂………」

鉄心

「暁君、君はなぜ、百代や釈迦堂と仕合しようと思ったのかね？」

暁

「それは、このままあの状態でいけば二人は、修羅の道を歩みそうだったからです」

釈迦堂・百代

「!!」

二人は、ドキッとした。

凶星だった。

鉄心

「気付いておったか……」

どうやら鉄心も薄々そう思ってたらしい。

暁は、コクリと頷いた。

暁

「二人はどうやら同世代もしくは年下の人に負けた事はなかったの
でしょう。」

そういう人は、人に敗けた時、かなり脆い」

釈迦堂・百代

「……………」

暁

「人間一回は、挫折したほうがいいと思います」

鉄心

「それはなぜかね？」

暁

「慢心があるからです」

釈迦堂・百代

「……………」

暁

「自分は強い、誰にも負けないそういう慢心した状態だと視野が狭くなる。」

極端な話、自分の周りしか見れなくなる」

釈迦堂・百代

「！」

どうやら思い当たる節があるようだ。

暁

「一度敗れ、慢心が無くなった時、人は成長するんですよ
二人は負けず嫌いみたいだから今の自分よりもっと強くって
今は思ってるんじゃないですか？」

暁は二人を見据えた。

釈迦堂

「はあ、参ったね、そこまで見据えられているとは……」
そういつて、頭を掻きながら、なんともすっきりした顔をしていた。

百代

「たしかに前の私は、慢心していたようだ。今は、
こんな近くに強敵ライバルがいる事がかなり嬉しい。
そして、今より心も体も強くなりたいとも思ってる！」

百代は嬉しそうにそう答えた。

二人とも肩の力が抜け、憑き物が取れた様な清々しい顔をしている。

釈迦堂に至っては、若干濁っていた目も濁りが無くなって禍々しい
雰囲気は無くなっていた。

暁

「後、もう一つは、鉄爺。たしかに川神流は、伝統とか色々あるか
もしれませんが、

それに合わないからダメとかおかしいと思いますよ？それも視野
が狭くなってる証拠ですよ」

鉄心

「た、たしかにのう（汗） 儂も視野が狭くなっていたようじゃ
のう」

暁

「わかってくれればそれでいいですよ。

もしわかっていただけてなかった場合は……………

潰してましたからね……………川神流」

そう言った瞬間、明らかに先ほどの数倍以上の氣を暁は出し、

背後に般若の顔が見える。

ゾクッ！

鉄心は、動けなかった。

額から冷たい汗が流れる。

この少年は、先ほど感じた氣よりもつとでかい！

儂と同様……いや、儂より強い！！

鉄心は2度とそんな事考えないようにしようと本気で思った。

他の全員もガクガクと震えていた。

全員

「(怖ええ……!!!!)」

暁は、殺気を消し、

暁

「とりあえず、ルーさんとの仕合しましょうか！」

そういつて、微笑んだ。

鉄心

「そ、そうじゃのう。ルーこっちに来なさい」

ルー

「イエ、私は遠慮させていただきマス。今ノ私では、到底勝てませんしネ(――;)」

困った顔でそう言った。

鉄心

「そう言っとなるが、(暁君) どうする?。」

暁

「そうですか。ルーさんとは戦ってみたかったので残念です」

鉄心

「まあ、仕方ないのう。ということで、仕合は終わりじゃ、騒がしてすまなかったのう、皆の衆」

そう鉄心が言ったその時、

???

『チィ！ ナンダヨ、セツカクイイカンジニ魂ガケガレタノニヨウ』

するとどこからか誰かの声がした。

釈迦堂

「ガあ！！」

釈迦堂の口から黒い靄のようなものが出てきた。

その黒い靄が集まり、人型へと姿を変え、そこから

顔はイナゴで腕が4本2対の人型のバケモノが姿を現した。

一子

「キャー！！！！！！バケモノ！！」

岳人

「おいおい、なんだありゃー！！」

卓也

「あ、あいつは・・・・・・・・!!!!!!」

翔一

「いい!!!!!!」

大和

「俺は夢でも見てるのか？」

風間ファミリーの面々は、混乱している。

鉄心

「なんじゃ、あれは・・・・・・・・物の怪か？」

百代

「なんなんだ、あれは！」

釈迦堂

「お、俺から・・・・・・・・出てきた・・・・・・・・だと!?!」

ルー

「アイヤー、妖怪ネ!!!」

暁

「あれは・・・・・・・・!!
悪魔^{デーモン}!!!」

t o b e c o n t i n u e d

第5話 『伝えたかった事』（後書き）

作者「ついに【敵】が現れた!!」

暁「これは意表を突かれたぜ。」

作者「次回は、暁君の武器での戦闘が見れますよ。」

暁「ああ!!」

作者「それは次回のお楽しみという事で恒例の技紹介のコーナー。」

技名

治癒巧

気功で相手の体力を回復させる技

登場作品…テイルズシリーズ

作者「次回、第6話 『悪魔』でまたお会いしましょう!」

暁「では、次の話で!」

第6話 『悪魔』（前書き）

ちなみに登場した悪魔の名前は、【ヴァースト】と言います。
ちなみに名前は、墮落するの英語訳 【debauch】と
イナゴの英語訳 【locust】を組み合わせ少しいじったもの
です。

ということで初の人外との戦いです。

※11／23 修正しました。

※11／22 加筆修正しました。

第6話 『悪魔』

突如現れた異形の物の正体とは……………？

暁

「あれは……………！^{デーモン}悪魔！！」

百代

「あれを知ってるのか！？」

暁

「ああ、あいつらは、この世界の物じゃない。悪魔界というセカイに棲む異形の物だ。」

見たところ、下級ランクと言った所か」

百代

「あれでか！あれはどう見てもじじいクラスだぞ！」

百代の言うとおりである。

悪魔が発してる禍々しい邪気は、

軽く川神 鉄心クラスだった。

暁

「ああ」

ヴァースト

「説明ハ終ワツタカ？ 人間」

そう言って複眼で暁を睨みつけている。

「ヨクモ邪魔シテクレタナ、アトモウ少シデ、
魂ヲ収穫デキタノニヨ」

釈迦堂

「魂を収穫だと？ ふざけるな！」

暁

「なるほど、最初からお前の仕業だったわけか？」

ヴァースト

「勘違イスルナ小僧。元々ソイツハ魂ガ穢レカッテイタカラナ。
チヨットオ手伝イシタダケサ」。ケケケWWW」

そう言って、下品な笑う。

暁

「お前たちにとって、穢れた魂は何より美味しいいな？」

ヴァースト

「アア、ヨダレガ出ル程ニナ」。

暁

「なるほどな、さて、俺はある人物から依頼されててな。
お前みたいなやつを狩る仕事をしている」

ヴァースト

「何？ オマエハモシカシテ、【デビルハンター】か？」

暁

「いゝや、違う。」

そうだな〜しいて言えば

【エージェント神の代行者】って、とこかな」

ヴァースト

「ッ！ キサマガカ！」

暁

「知っているのか？」

ヴァースト

「俺ヲコノセカイニ召喚シタ男ガ、ソウイッテタ」

男？ そいつが黒幕か。

暁

「召喚した男って言うのは？」

ヴァースト

「オット〜、コレ以上シャベルト俺ガ消サレルノデネエ」

暁

「ふむ、そうか。とりあえず、お前を滅する！」

その瞬間、圧倒的な氣が放たれた。

ヴァースト

「ホウ、コイツハヤバイナ〜、ヒトマズ逃ゲサセテモラウゼ〜」

そういつて、逃げようとするヴァーストを

暁

「ゴルゴネイオン！」

光の複数の輪がヴァーストの動きを封じるように

まるごと束縛した。

ヴァースト

「ナッ！動ケネェ」

ヴァーストは、ジタバタしている。

暁

「続けて、五連結界（小）」

暁とヴァーストを包むかの如く半径500m一帯に強力な結界を張った。

百代

「おい、アキラ何をしてる！」

暁

「こいつは、俺が減する。」

今いるメンバーでは俺しかこいつを倒せない！」

百代

「なんだとー！」

暁

「事実だ。お前たちでは、悪魔に傷をつける事が出来ない。できるとすれば……………」

そういつて、

左手を前につき出し、

「create!!我、求めるは、魔を斬りし剣、現れ出でよ!」
【魔戒剣】!」

そういうと一振りの剣が突然現れた。

ヴァースト

「ソ、ソレハ魔戒騎士ノ!」

暁

「知ってるらしいな。では往くぞ!」
せめてもの情けだ、かかってこい!」

ヴァーストを拘束した光の輪が解かれ、自由になる。

暁は、手でクイクイと挑発している。

ヴァースト

「クッ! オノレ! 返り撃チニシテヤル!!」

そういつて襲いかかってきた。

暁は、剣を抜き、頭上に円を描いた。

その瞬間円の内側から光が漏れ、

一瞬にして、暁は、黄金の獣の仮面を付けた騎士姿になった。

そして、剣も先ほどの細い剣から幅広の装飾が美しい剣【牙狼剣】へと変化した。

ヴァースト

「黄金騎士だと!?!」

ヴァーストは驚いていた。

暁

『借り物だけどな!』

暁は、剣を横にして、魔導ライターで緑色の炎を付け、剣に炎を纏わせた。

ヴァースト

『死ネー!!!』

ヴァーストは、全ての手の爪を伸ばし、襲いかかってくる。

暁は、剣を構え、

暁

「空破斬!!!」

炎を纏った剣を超高速に振り、緑の炎を纏ったソニックブームを発生させた。

隣れ、ヴァーストは、真っ二つになり、そのまま炎に焼かれた!!

ヴァースト

「グギャーーーー!!」

ヴァーストは、断末魔を上げそして跡形もなく消え去った。

それを確認して、暁は、黄金騎士状態を解除した。

暁

「ふう」

百代

「アキラ・・・・・・・・お前は一体・・・・・・・・何者だ？」

b e c o n t i n u e d

t o

第6話 『悪魔』（後書き）

作者「とりあえず、悪魔との戦いいかがだったでしょうか？」

暁「俺、牙狼になっちゃった（――；）」

作者「一応、説明するけど暁のcreateは、イメージしたものは全部作れます。しかも、オリジナルと同等もしくは、それ以上で。」

暁「イメージだけでそこまで作れるか？」

作者「何にあほ言ってるんだちみは。おまえには、

ありとあらゆる知識あるだろうが（――；）」

暁「そういえば、そうだった。あまりに出て来ないからすっかり忘れてた。」

作者「しっかりしてくれよ主人公。」

暁「なんかこいつに言われるとなんかむかつく！」

作者「とりあえず、暁は、放置して・・・」

暁「放置するな！あ、一つ疑問が？」

悪魔倒すの物凄くあっさりしてないか？」

作者「それはですね。ヴァーストも弱くはなかったんですよ。鉄心クラスだし。でもそれ以上に暁が強かったそれだけの

話です。」

暁「なるほど。」

作者「毎度おなじみ技の説明コーナー。」

技名

ゴルゴネイオン

光の複数の輪で相手を包み込み拘束する技

登場作品…カミカゼ☆エクスプローラー

技名

空破斬

剣風でソニックブームを起こし、敵を攻撃する技。

登場作品…スターオーシャンシリーズ

作者「さて次回、第7話『二人の少女』でまた会いましょう!」

暁「では、次回も活目してみよ!」

第7話一? 『二人の少女 前編』 (前書き)

今回は、ちょっと長くなるので、前後編ということで
まずは、京から。

※11／22 加筆修正致しました。

11／23 微修正しました。

第7話一? 『二人の少女 前編』

百代

「アキラ…… お前は一体何者だ？」

暁

「……近日中に話します。それで皆さんいいですか？」

鉄心

「かまわんよ」

鉄心はそう言ったが、百代は、納得できていないが渋々頷いた。

他のみんなも納得はなかったがそのときは、頷くしかなかった。

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

少女は、いつからか虐めを受けていた。

クラスの男子達は、物を隠したり、机に落書きしたりとネチネチとした間接的な虐め^{いじ}。

クラスの女子達は、無視。担任もその事を黙認しているようだ。

同じクラスの直江 大和は、その虐めが、悲惨なものだという事を知っていても

やはり、自分もしくは、自分の仲間が虐めを受ける事は、耐えられ

ない為、

静観しているしかなかった。

椎名 京は、物凄く無口だった。それに我慢強い。

それが他のクラスメイトにとっては、

何を考えているか分からない。そう見えたのだろう。

俺には、唯、何を言われても耐えている寂しそうな女の子にしか見えなかった。

しかし、子供というのは、残酷だ。

自分がされたくない為、その標的を生贄にし、自分を正当化する。

発端は、京の母親が原因らしい。

京の母親は、元来の男好きだ。その為、複数の男性と関係を持っていた。

その事が父母達の間で噂になり、自然とその子供達に伝わったのだろう。

それが原因で、京は虐められていた。

クラス男子1

「椎名菌く、どっかいけよう。」

クラス男子2

「もう学校来るなよ」

そう言って、クラスの男子達が京に言葉の暴力を発している。

???

「…うるさい。だまれ！」

人を殺せそんな低い声である男子が言った。

京

「……え？」

京が振り向くとそこには、肩位に髪が伸びた正に美少年の男の子が立っていた。

クラス男子1

「な、なんだよ。転校生」

クラス男子2

「お前もこいつと一緒にいじめてるぞ」

ちやうどその騒ぎを他のクラス全員が見ていた。

暁

「聞こえなかったか？だまれといったんだ」

殺気を放ちながら、そう言った。

クラス男子1

「ヒッ……!!」

暁

「ちょうどいい機会だ。お前達にいい経験をしてやろう。」

暁

「幻夢光！」

そういうと、京と大和・暁全員は、幻を見た。

それは、人に虐められる幻だった。

クラスから悲鳴や苦痛の声がした。正に阿鼻叫喚の図だった。

それから3分後

暁

「ジャスト、3分だ」

パリーンという音共にその幻は消え、

クラス全員は、目を覚ました。

クラス全員

「はぁ……はぁ……」

全員は、額から冷や汗を掻き、ガクガクブルブルと震えている。

暁

「それがお前達がやっていることだ」

暁がそう言うのとクラス全員ハッと暁の方向に顔を向けた。

暁

「それとな、親の事だろ？」

椎名本人には、関係ないじゃないか。

もう虐めも止めろ。もし、同じことをしてみろ。

お前達に死よりもおそろしい苦痛をやろう」

そういつて、クラス全員に冷酷な表情で言った。

もちろん、演技である。

クラス男子1

「し、椎名、ごめんな」

クラス女子1

「椎名さん、ごめんなさい…… つらかったよね？」

京は、何が起こったのかわからなかった。

クラスメイトが一斉に謝りだしたのだ。

京が、戸惑っていると暁がそばにやってきて、

暁

「もう、大丈夫だ。だからもう我慢しなくていいからな」

そう優しく言って、京の頭を優しく撫でた。

京

「も、もう我慢しないでいいの？」

暁

「ああ」

その瞬間、京は、泣き始めた。今まで抑え込んでいたものがあふれた瞬間だった。

京

「ア：アアア~~~~~!!」

その後、その騒ぎを聞きつけ、担任がやってきて、校長室に連れて行かれたが、

今までの事を校長に話し、その結果、担任は、遠くの学校に飛ばされた。

ちなみに担任にも幻夢光をかけ、怖い幻を見て頂いた。

今まで黙認していたのだからそれくらい当然の罰だ。

そして、うちの新しい担任には、

教員免許を持っているうちのメイドの一人の

要^{かなめ} 由岐子^{ゆきこ}になった。

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

京 side

今日もクラスの男子達から言葉の暴力を受けていた。

他のクラスメイトも見えて見ぬふりだ。

私はジッと耐えた。

これはいつもの事だ……

もう諦めている……

???

『……うるさい、だまれ!』

思わぬ人物が、私を助けてくれた。

名前は、天錠 暁

先日転校してきた男子だ。

天錠君は、私に絡んできた二人及び他のクラスメイトを睨みつけ、

何かをした。

その瞬間、クラスメイト達から悲鳴などが教室中から聞こえた出した。

私は、何かわからず呆気にとられていた。

3分後、天錠君の合図でみんなは、目を覚ましたようだった。

それから冷酷な表情でクラスメイトに虐めを止めるように脅していたのだった。

他のクラスメイトは、恐怖の張りついた顔でコクコクと頷いていた。

どうやら、3分間の間、物凄く怖い体験をしたのだろう。

クラスメイト達が、謝ってきた。

後で、天錠君に聞いてみたら、はぐらかされたが、直江君に聞くと

どうやら、私と同じ虐めを身を持って体験させたらしい。

天錠君は、一体何者なのだろうか？

私は、考えてしまったが、

次の瞬間、天錠君は、優しい笑顔で私の頭を撫でて、

暁

『もう大丈夫だ。だからもう我慢しなくていいからな』

そう言われた私の中で、我慢してきたものが、一気に噴出した。

親の前でも泣けず、人が周りにいるときにも泣けず、まして、

一人でいるときにも泣けない、

本当に苦しかった！

切なかった！

情けなかった！

辛かった！

いろんな感情が一斉に溢れ出す。

それから数分間、私は涙を流して大声で泣いた。

京 side out

京

「なんで、助けてくれたの？」

京が訊ねると

暁

「俺の自己満足だ」

そういつて、ぶっきらぼうに言い、顔を背けた。

京

「ふふっ」

京は、その顔をじっと見て笑っている。暁が恥ずかしそうに顔が少し赤いからだ。

暁

「何笑ってるんだ？」

暁は、ちらりこっちを見て、なんとも言えない困った顔で言った。

そして、京はいい笑顔で、

京

「助けてくれて、ありがとう」

思わず、暁は、京の笑顔に釘付けになった。

それ程、京の笑顔は魅力的だった。

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

それから最初は、ぎこちなかったクラスメイトと京だったが、時間がたつにつれ、

京を無視いた女子達も積極的に京と関わって仲良くなり、

また、クラスの男子も自分達のしたことを反省し、

京と関わるようになり、

京も少し明るくなってみんなの誤解も解け、友達も増えたようだ。

京は、本当の意味でクラスの一員のなることができたようだ。

それを見てか、他のクラスの子達も椎名を虐めなくなった。

あと、学校全体にある噂が流れた事もその要因である。

その噂とは、

【人を虐めると怖い怖い魔王がやってきて、恐ろしい目に会う】

なんとも小学生らしい噂だ。

まあ、俺としては苦笑いするしかなかったがな（^^;）

それとなぜかときどき京が俺を見る時、心なしか顔を赤らめて嬉しそうに

潤んだ目でみるのだが、

オイオイまさか…

惚れられたか？ まさかな……。

後編に続く……

第7話一? 『二人の少女 前編』 (後書き)

作者「初の前後編となりました。」

暁「なんで前後編なんだ?」

作者「書いてる間に話長くなっちゃって、見づらくなるから前後編に分けた。」

暁「なるほど。でも結構原作と違うよな?」

京助けるのリユウゼツラン防衛の後だろ? たしか。」

作者「んー、なんとか早めに助けたかったというのが本音だね。」

あと、作者も本当に虐められた事あるけど、あれはきつい。」

暁「ふむ。」

辺りが一瞬暗い雰囲気になった。

作者「・・・なんか、思い出したら泣けてきた(;O;)」

暁「泣くなよ(ー;とりあえず、技の説明のコーナーいくぞ。」

作者「・・・うんOTL」

技名

幻夢光

相手に、3分間色々な幻を見させる技。(集団でもかけられる。)

ある意味、Get backersの美堂 蜜の邪眼のパワーアップ版みたいな感じ。

登場作品…オリジナル

暁「作者がかなり落ち込んでいるので

次回『第7話ー？ 二人の少女 後編』でまた会おうぜ！」

作者「・・・OTL」

暁「（一一；）」

第7話一? 『二人の少女 後編』 (前書き)

ということで、第7話後編です。
小雪メインの話になっております。

※11／22 加筆修正しました。
11／23 微修正しました。

第7話一? 『二人の少女 後編』

少女は、母親と暮らしていた。

父親は最初から一緒に住んでいなかった。

母親は、育児に疲れてしまい、そのストレスから

少女に暴力を奮っていた。俗に言う虐待だ。

少女の身体には、無数の痣と傷跡、服は薄汚れていた。

どうやらずっと同じ物を着ているようだった。

そのせいか、少女は周りから悪質な虐めを受けていた。

少女には、友達が一人もいなかった。

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

俺は、いつもの空き地に着いた。ここでいつも

風間ファミリーの面々と遊んでいたから。

ちょうど大和の姿を見つけ、手を振ろうとした時に

どうやら大和は、誰かと話していた。

見慣れない女の子。

大和

「……定員オーバーだ」

大和がそう告げると女の子は、絶望した顔で俯いてしまった。

俺は、とりあえず、大和に気づかれない様背後に移動し、

そして

ゴチーン

大和の頭に拳骨を喰らわせた。

ちなみに手加減はしてるが痛いやつね。

大和は、頭を押さえうずくま蹲った。

大和

「い、痛って、誰だよ……！！ げっ！ し、師匠！！」

大和は、一瞬驚いたが、バツの悪い顔をして顔を背けた。

暁

「こら、大和！ お前、この子に何言った？」

有無を言わせない凄みのある声で、大和に言った。

大和

「……俺は、ファミリーの定員オーバーだから入るのは無理と言っ

「たんだ！」

それを聞くと、暁は、

暁

「大和君、君、何勝手な事言ってるのかな？」

明らかに怒気を孕んだ声でそう言った。

大和

「イツ！す、すいませんでした＞（　　）＜」

大和はその場に土下座した。

たしかに最近、京が入ったせいかなそういうのにファミリー全員が敏感になってるのを分かるが・・・・・・

暁

「軍師的な立場は分かるが、これはみんなで決めることだろう。勝手に言ってるんじゃない！」

見知らぬ女の子も驚いていた。

暁

「お嬢さん、この馬鹿弟子が大変失礼な事を言ってますいませんでした」

そう丁寧に言って、頭を下げた。

女の子は、頭を下げられ、どうしたらいいか分からないようだった。

暁

「俺の名は、天錠 暁 君の名前は？」

??

「小雪…… 柏木 小雪……」

少女は、おどおどしながらそう名前を答えた。

暁

「俺と友達になってくれないか？」

満面の笑顔で訊ねると、

小雪

「……いいの？」

小雪と名乗った少女は、予想外の言葉を聞き驚いているようだった。

暁

「ああ！」

暁は、元気に答えた。

小雪は、自然と涙を流した。

小雪

「ヒック……ヒック……う、うれしい、うれしい
よー うわあーん！！」

その後、小雪は盛大に泣いた。

俺達は、突然泣き出した小雪を二人で右往左往しながら宥^{なだ}めるのだ
った。

小雪 side

その日私は、マシユマロを持って例の空き地に向かった。

目的は、その空き地でいつも遊んでるグループに入れてもらう為だ。

そして空き地に着いた。そして、そのグループの男の子に

勇気を振り絞って、グループに入れてほしいと声をかけた。

すると

大和

『悪いけど定員オーバーだ』

目の前が暗くなった。

絶望した。

ここでも拒絶されたのだ。

私は、下に俯くことしかできなかった。

ゴチーン

突然殴られる音がした。

顔を上げると先ほど話をしていた少年が、頭を抱えて蹲っていた。

どうやら殴られたのは、この子らしい。

そしてその子の背後に

その子を殴ったであろう別の男の子が立っていた。

殴った別の子は、頭を抱えている子に怒っているようだ。

なんで？

一瞬理解ができなかった。

その後、師匠と呼ばれた男の子は、私が話していた男の子に説教をしていた。

そして、

暁

『お嬢さん、この馬鹿弟子が大変失礼な事を言ってすみませんでした』

そう言って、師匠と呼ばれる男の子が頭を下げたので、

私はどうしていいかわからず固まってしまった。

男の子は、自分の名前を言った。天錠 暁君というらしい。

そして、私に友達になってくれといってきたのだ。

と、友達？ 私と？

私は、信じられず聞いてしまった。

すると暁君は、元気な声で答えてくれた。

嬉しい！！！！

嬉しい！！！！

これ夢じゃないよね？

現実なんだよね？

本当にうれしい！！！！

つう・・・・・・・・

あれ？ 頬がなんか冷たい？

これは、涙？

私、泣いてる？

いつの間にか泣いていた。

それ程、今嬉しい・・・・・・・・！

生きてて良かったそう思える瞬間だった！！

小雪 side out

それから空き地で他のメンバーを待ってみたが、
やってこなかった。とりあえず、日を改めて紹介する事となり、

小雪は家に帰っていった。

大和

「なあ・・・・・・・・？ 師匠？」

暁

「ああ・・・・・・・・分かってる・・・・・・・・」

小雪の服装、所々ある痣。それが気になっていた。

暁

「少し、調べてもらうか・・・・・・・・」

そういつて、指を鳴らすと背後にメイドの一人が膝を附いて現れた。

大和

「いい！！」

いきなり現れたメイドに驚いている。

暁

「南雲さん、今の聞いていた？」

来夏

「ハ！」

暁

「それじゃ、お願いね？」

そういうと南雲さんは、バシユンという空気音を残し、

今いた所から消えたのだった。

暁

「俺の考えが、正しければ……………」

暁は、厳しい表情でそう呟いた。

t o b e c o n t i n u e d

第7話一？ 『二人の少女 後編』（後書き）

作者「というわけで第7話後編でした。」

暁「なんか最後のほう新キャラ出てたな。」

作者「それは、次の話で紹介されます。」

暁「にしても思い切りまた原作ブレイクしてるねえ。」

作者「それは、ゲームしててあまりに小雪かわいそうなんだもの。
助けたくなるじゃん！」

暁「たしかにな。」

作者「あ、そうそう小雪と言えば次の話に彼らも出てきますよ。」

暁「ああ、あいつらね。」

作者「という事で、次回第8話 『新たなる仲間達』でお会いしましょう。」

暁「では、またな（＾Ｏ＾）」

第8話 『新たなる仲間達』（前書き）

という事で、あの人達+新キャラの登場です。

※11／22 加筆修正及び一部内容変更いたしました。
11／23 微調整しました。

第8話 『新たなる仲間達』

暁 side

??

「失礼します」

ドアが開き、一人のメイドが暁の部屋に入って来る。

メイドの名は、南雲なぐも 来夏らいか

10人いるうちの1人だ。

主な仕事は、偵察・身边警護。

要するに昔で言う処の【お庭番】だ。

暁

「南雲さんか。どう？　なんかわかった？」

来夏

「これを……………」

そういつて、あるファイルが渡される。

柏木 小雪の身边などが書かれたファイルである。

俺は受け取ってさっそくそれを読むと言葉を失った。

それ程の内容だった。

柏木家は、小雪が生まれてまもなくは、両親ともにおり、生活はまともだったようだ。

父親は、建設会社の社長をしていたが、小雪が5歳になったときに会社が倒産。その後借金を作り行方不明になっていた。

母親も最初は小雪を真面目に育てていたが、

借金問題や育児ノイローゼにかかり、

そのストレスから小雪に虐待をしていたそうだ。

最終的に育児から解放されたという願望なのか、

とうとう、育児放棄^{ネグレクト}してしまった。

その為、服はいつも同じで薄汚れており、

食事も満足に与えてないらしい。

またその容姿の為、学校で虐められているようだ。

来夏は、手をギュッと強く握って、

来夏

「ゆるませません・・・、子供にこんな・・・!!」

来夏が怒るのも無理はない。

俺自身もかなりの憤りを感じている。

暁

「南雲さん。彼女を見守ってもらえませんか？
何かあればすぐ助けられるように……。」

来夏

「お任せください！ 失礼します！」

そういつて、暁の部屋から出ていった。

暁は考えていた。

これで学校以外は、助けられるが問題は……

小雪は隣町の学校通っている。

自分もおいそれと助けにいけない。

隣町に友人がいれば助けられるのだが……

暁 side

次の日曜日。俺は、隣町まで足を伸ばした。

新しい出会いがありそう、そんな気がしていた。

すると曲がり角で誰かとぶつかった。

ドン

??

「ッ！」

見たところ俺と同じくらいの少年が地面にお尻を突いていた。

暁

「ッ！すまない！大丈夫か？」

そう言って、手を差し出すと

??

「……ええ、大丈夫ですよ」

そういつて、ニッコリと笑顔を浮かべ差し出された手を握って立ちあがった。

暁

「こちらの不注意だ、すまない」

??

「いえ、こちらもよそ見していたのでお気になさらず」

しゃべり方からしていいとこの子なのだろうとそう思った。

?

「若く、どこだ？」

誰かを呼んでいるようだ。

暁

「ん？」

??

「どうやら、私の連れのようです」

そう言う就先ほど人を呼んでいた男の子が近くに寄ってきた。

?

「探したぜ、若く。ん？そっちのやつは？」

??

「今、ちょうどその角でぶつかりましてね」

?

「ぶつかってだど？怪我はないのか？」

そう言って、品のいい少年の全身をくまなく見ている。

??

「はは、大丈夫ですよ。軽くでしたし。こちらが悪いのですから」

?

「心配させないでくれよ。若に何かあったら俺が怒られるんだからな」

暁

「それじゃ、俺はこれで」

そう言って、立ち去ろうとすると

??

「待って下さい。よかったらお話しませんか？」

暁

「話しか。別にいいよ暇だし。俺は、天錠 暁 君は？」

??

「これは申し遅れました。葵 冬馬と申します」

そういつて、ニツコリと笑みを浮かべた。

?

「俺は、井上 準。まあ、若の付き人みたいなもんだ」

「葵君に井上君ね、よろしく！」

そう言って、笑顔で手を差し出した。

二人は一瞬驚いたがすぐに笑みをこぼして交互に握手を交わした。

これが、葵 冬馬と井上 準の出会いであった。

冬馬 side

葵 冬馬は、絶望していた。

尊敬する父が裏であんな事をしているなんて・・・

臓器売買・大手医療機メーカーからの賄賂。

医療ミスの隠蔽工作など人として許される物ではない。

しかし、今の自分には、それを暴露する勇気が無い。

自分はなんて弱い人間なのだ。

そんな事を考えていると情けなくなってくる。

そう言う事を考えながら道を歩いていると

ドン

どうやら廻り角で誰かにぶつかったらしい。

その少年は、肩まで長い髪をしており、いわゆる美少年だった。

その後、先ほどのやり取りがあり、準がやってきた処で

先ほどぶつかった少年がこの場を立ち去ろうとしたので、

思わず声をかけてしまった。

なぜ、私は、声をかけてたのだろう。

しかし、理由は分かっていた。

この少年ならこの絶望を救ってくれるかもしれない。

確証はなかった。でも、そんな感じがした。

しかし、この出会いが彼を絶望から救い出し、

今後、生涯の友と呼べる運命の出会いだった。

冬馬 side out

その後、場所を変えて、近くの原っぱへと3人で向かい、話をした。たわいもない世間話からお互いの事まで、

色々と話した。

暁

「葵紋病院の院長の息子と副院長の息子だったのか」

一瞬二人の顔が少し歪んだが、すぐに戻った。

何だ？ 物凄く違和感を感じた。

冬馬

「そういうあなたも天錠グループの御曹司とは驚きました」

準

「そこまで凄いなら護衛付けなくていいのか？」

暁

「一応、近くにいますよ」

冬馬・準

「え？」

二人は驚いている。

暁

「呼ぼうか？」

冬馬

「い、いえ、結構です」

準のほうもウンウンと頷いている。

それから少しまた違う話をしてからの事だった。

冬馬

「天錠君。一つ質問していいですか？」

暁

「なんだい？」

冬馬

「もし、自分の信じている者が間違えていたら私はどうすればいいのでしょうか？」

冬馬は悲しそうな顔でそう言った。

なるほど、さっきの表情はこれだったのか。

暁は納得した。

暁

「とりあえず、俺の答えでいいかい？」

冬馬

「はい……………」

暁

『ふむ、そうだな。なら間違っていたら
正せばいい』

冬馬

「もし、今の力じゃ正せなかった場合は？」

暁

「ふむ、俺はあきらめないな。何か方法はあるはずだから
かたっぱしからやっていくかな？」

冬馬

「ふむ」

暁

「でも一人でどうしようもない場合は、仲間を頼るかな？」

冬馬

「仲間ですか……………？」

暁

「ああ」

冬馬

「私には、準しか仲間がいません、それでも駄目な時は……」

暁

「俺がいる！」

冬馬・準

「え？」

冬馬も準も驚いていた。

暁

「俺達、もう仲間だろう？　なら遠慮しなくていい！」

冬馬

「しかし、私達出会って間もないですし……」

暁

「袖すりあうのも多生の縁という諺もあるじゃないか、
気にするな！」

冬馬は、不覚にもその言葉で涙が出てきた。

準

「わ、若！？」

冬馬

『あ……、あり……が……どう……ございます……。』
冬馬は泣きながらそう答えた。

それから、冬馬が泣きやむのを待って、事情を聞いた。

暁

「なるほど」 父親が不正をねえ」 鈴竹さん、います？」

澪

「はい、ここに」

すると一瞬にして暁の背後にメイドが現れた。

冬馬と準はびっくりしている。

暁

「今の聞いていたよね？」

澪

「はい、聞いておりました」

暁

「じゃ、お願いね？」

澪

「はい！」

シュン

滯は、その場から消えた。

冬馬

「今の人は？」

暁

「うちのメイドさんの鈴木^{すずたけ} 滯^{みお}さん」

準

「凄い人雇っているんだな」

準は驚きすぎて呆然としながらそう言った。

暁

「まあ、ね、でも彼女、最近入った子だから新人だよ」

準

「新人であるLVかよ……」

冬馬

「本当に天錠君は、面白いですね」

そう言って、笑っている。

暁

「そうか？ それと天錠君ってのはやめにしないか？

なんかむず痒い。アキラでいいよ。呼び捨てで！」

冬馬

「そうですか、ならアキラ君で」

準

「俺は、アキラで」

暁

「そっか、俺もお前達の事名前で呼ぶわ」

冬馬

「あらためて、私と友達になってくれませんか？」

準

「俺もおまえとなら友達になりたい！」

暁

「ああ、これからよろしくな。冬馬・準！」
再度手を差し出す。

冬馬

「ええ、よろしくお願いします」

準

「ああ、よろしく」

そして交互に握手を交わした。

【上辺】だけの友達から【本当】の友達になった瞬間だった。

ピリリリ・・・ピリリリ・・・

暁の携帯電話が鳴った。

暁は、二人に謝り携帯に出た。

暁

「もしもし、南雲さん？ どうした……」

来夏

「大変です！ 小雪ちゃんが！」

暁

「！！」

それは突然の知らせだった……

t o b e c o n t i n u e d

第8話 『新たなる仲間達』（後書き）

作者「ということで冬馬&準の登場です。」

暁「おぉ〜パチパチ」

暁「にしても新キャラが2人でるとは〜。」

作者「仕方ないじゃん、南雲さんは、小雪の監視。

護衛役は絶対一人付かないといけない設定なんだもの。」

暁「聞いてね〜ぞ？」

作者「今、言ったからね〜。」

暁「開き直るな！」

作者「テヘ♪」

暁「殺す……。」

作者「その剣は、待て、待ってくれ、いや待って下さい!。」

暁「問答……無用!」

ザクッ!

作者「おお……う、じ、次回、第9話 『涙』で
また……会いま……しょう……ガクッ」

暁「ではまたな」

第9話 『涙』（前書き）

ということ、オリジナル展開です。

※第9話の題名を『リュウゼツラン』としてましたが、書いてる内容が、当初思い描いていた内容から変わってしまったので、題名を変更させていただきました。楽しみにしていただいた皆様心よりお詫び申し上げます。また感動的なシーンで顔文字を使ってしまう、違和感や不快に思われた方々、大変失礼いたしました。11/23加筆修正させていただきました。

第9話 『涙』

来夏 side

今日も小雪ちゃんの身边に異変がないか監視中です。

どうも申し遅れました 私、南雲 来夏と申します。

暁様のメイドの一人でございます。

先日から暁様の命により、この任務を遂行する事になりました。

皆さまよろしくお願いします。

おや？ 何か小雪ちゃんの家の中に異変が… あれは！

小雪ちゃんの母親が小雪ちゃんに馬乗りになり、首を絞めている！

まずい！ そう思った瞬間、私は、小雪ちゃんの家ドアに向かい
ドアノブを捻りましたが、

中から鍵がかかっているようです。

仕方ない、強行突破です。

バキ！ ドカ！

ドアを蹴破って家の中に入り、

来夏

「あなた！なにしてるんですか！」

小雪の母親

「…あなたこそ、誰？ 邪魔をしないで！！」

そういつて、母親は、近くにあった裁断用ばさみを持って、襲ってきました。

しかし、私にとっては、相手の動きが遅すぎる為、母親の側面に素早く移動し、

手に持っているハサミを奪い、遠くに投げ、それから母親の鳩尾に

強烈なボディブローを打ちこみました。

小雪の母親

「うぐ！」

ドサッ

そのまま、母親は崩れ落ち、意識を失いました。

それを確認すると、小雪ちゃんの元へ駆け寄りました。

私は、驚きました。

小雪ちゃんの髪の色と瞳の色が：

ハッ！

動揺している場合ではありません。

小雪ちゃんが無事かどうか調べなくては！

.....

ほっ！

どうやら息はあるようです。でも危険な状態なのは変わりません。

私は確認を終えるとすぐに救急車と警察を呼びました。

数分後、救急車と警察が駆け付け、

私と小雪ちゃんは病院に、母親は殺人未遂の罪で警察に連行されて
行きました。

その後、病院に着き、小雪ちゃんは処置室へと連れていかれました。

私は、この事を曉様に連絡をしました。

来夏 side out

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

南雲さんから連絡を受けた俺は、天錠家の御用達の川神大学病院に
向かっていた。

冬馬達に事情を話しその場から離れようとしたとき、

冬馬

「僕達も連れて行って下さい！」

準

「頼む！」

二人共、何か感じたのだろう。着いてきてくれた。

それから15分かけてようやく目的の病院に辿り着いた。

ロビーに入ると南雲さんが待っていた。

暁

「南雲さん、一体、小雪に何があったというんだ！」

来夏は、暗い表情をして、顔を下に俯いた。

来夏

「ここではなんですから、談話室に… おや、そちらのお二人は？」

冬馬

「はじめまして、申し遅れましたアキラ君の友人の葵 冬馬と申します。

となりにいるのは、同じく友人の井上 準です」

準

「はじめまして、井上 準です」

そう言って、二人は来夏にお辞儀をした。

来夏

「天錠メイド隊 第2席 南雲 来夏と申します。お見知りおきを……」

そう言って頭を下げた。

来夏

「アキラ様、お二人とも？」

暁

「ああ、事情は話している」

来夏

「では、こちらに」

それから4人で談話室に移動した。幸いな事に俺達以外、人はいなかった。

暁

「もう一度訪ねる。一体何があった？」

来夏

「……小雪ちゃんは、母親に首を絞められていました……」

南雲さんは、悲しそうなどこか憤りを感じるような表情でそう言った。

拳を物凄く強く握っている。

暁・冬馬・準

「!」

3人は絶句した。

その後、南雲さんから色々話を聞いた。

小雪は、母親から首を絞められたショックから

髪が白くなり、瞳も真っ赤になったらしい。

母親は、警察に保護責任者遺棄及び殺人未遂の罪で逮捕された。

暁

「小雪は、頼る親戚入るのか？」

当然、母親の親権は今回の事で無くなるだろう。

そうすると小雪の今後が焦点となる。

来夏

「それが……親戚一同、小雪ちゃんを引き取りたくないとの事です
…」

暁

「何だって?」

来夏

「どうやら母親と折り合いが悪かったようです…」

暁

「という事は、小雪はこのままだと児童相談所もしくは保護施設行きという事か？」

来夏

「…はい」

ダン！

俺は、談話室の壁を叩いた。

暁

「畜生……そんなのってあるかよ…」

それを見ていた冬馬が口を開いた。

冬馬

「その事なんですが……」

暁

「それは、本当か！」

冬馬

「はい」

冬馬は一体、何を提案したのか？まあ、感のいい方はお気づきだろうが……

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

小雪

「うんん……ここ……は？」

暁

「病院だよ」

小雪

「…アキラ？」

そう言って、辺りを見回すとアキラと知らない二人の男の子と知らない大人が3人。

暁

「よかった…目を覚まして…」

小雪

「ボクは……一体…」

それから俺は、順序良くいままでの事を話した。

小雪

「そっか、ボク、お母さんに首を絞められて…」

暁

「ああ…」

小雪

「……僕がいらない子だから、お母さん壊れちゃったのかな……」

周りの全員が言葉を失った。

暁

「なんで、そんな事を……」

小雪

「だって、そうでしょ！

ボクがいなければ、お母さんが壊れる事はなかったのに！」

パシン！

小雪の頬を来夏が叩いた。

小雪は何が起こったか分からなかった。

来夏は泣いていた。

小雪

「な……なんで……お姉ちゃん……泣いてるの？」

来夏

「お願いだから…… そんな悲しい事言わないで……」

そう言って、来夏は、小雪を優しく抱きしめた。

小雪

「ボ、ボクは…」

小雪は戸惑っていた。

暁

「そんな寂しい事言うなよ。俺達、友達だろ？」

俺は絶対小雪をいらないなんて思った事はない！」

そう言って、ニカッと笑った。

小雪

「ボクは……ここにいていいの？アキラの友達で……いいの？」

暁

「当たり前だろ？」

その答えを聞くと小雪の目からポロポロと涙が流れてきた。

小雪

「う……うわ……」

「……」

小雪は泣き始めた。

……

小雪が泣きやんで落ち着くのを待って

今度は、見知らぬ男の子達が声をかけてきた。

冬馬

「はじめまして、私は葵 冬馬」

準

「俺は、井上 準」

冬馬・準

「よろしければ、私と（俺と）友達になってくれませんか？（なつてくれないか？）」

小雪

「…え？ 私と友達？」

冬馬・準

「ええ！（ああ！）」

小雪は、どうしていいか分からず、暁のほうを見た。

暁

「小雪はどうしたい？」

そういつて頭を撫で優しく語りかける。

小雪

「ボクも……友達になりたい！ ボクと友達になってください！」

冬馬・準

「こちらこそ、よろしく」

こうして、後の川神学園2―Sトリオが出会ったのだった。

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

それから、暁は、小雪のこれからの事を話した。

母親とは一緒に暮らせない事。

小雪は、頼る親戚がない。

このままでは児童相談所もしくは保護施設行きという事。

小雪

「みんなと離れるのはヤダ〜！」

冬馬

「そこで提案があるのですが、ここにいる榊原夫妻の養女になりませんか？」

榊原夫妻は、にっこりと小雪に微笑んだ。

榊原夫人は、子供が出来ない身体らしく、子供が欲しくてたまらなかったそうだ。

ちなみに冬馬の紹介だが、榊原さんは、冬馬のお父さんの不正には、一切関与してないらしい。

小雪も最初、警戒してたが、榊原夫妻の人柄がわかったらしく

夫妻に懐いていた。

小雪

「お母さんともう一緒に暮らせないのは悲しいけど、ボク、おじさんとお婆さんの養女になる！」

その言葉に榊原夫妻は大層喜んだ。

冬馬は、喜んでいる榊原夫妻と小雪を見ながら、口を開いた。

冬馬

「私は、彼女が虐められていることを知っていました」

暁

「……………」

暁は黙って冬馬の話に耳を傾けている。

冬馬

「私は、自分には関係ないと彼女を見捨ててしまったのです」

暁

「……………」

冬馬

「知らなかったとはいえ、私はなんと愚かな事を……」

そういつて、悔しそうな表情をして、唇を噛んでいる。唇からは血が流れていた。

暁は、冬馬にハンカチを差し出した。

暁

「冬馬、自分を責めるな。お前がいなければ、

小雪は、保護施設行きだったんだから。

お前には感謝してる…」

冬馬

「しかし!!」

冬馬が声を荒げた。

小雪

「冬馬、ありがとう……君のおかげでボクは、家族が出来たよ」

小雪が優しい笑顔でそう言った。

冬馬

「あ… あ…… ああああ!!!!」

冬馬は、その一言で自分の罪が許された気がした…

準

「…若」

そう言って、泣いている冬馬の肩に手を置き、準は目を瞑った。

それから小雪は、榊原夫妻の養女となり【柏木】姓から【榊原】姓になった。

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

★☆☆☆☆

小雪が退院してから数日後、鈴竹さんから葵紋病院の不正に関する資料が手元に届いた。

暁は、冬馬と準と小雪を屋敷に招待した。

小雪

「うわゝ、部屋が広いね」

準

「真剣で、いい部屋に住んでるな」

準と小雪は、部屋のあちこちを見て驚いていた。

冬馬

「準、ユキ、はしたないですよ？　それでアキラ君、話とは？」

暁

「ああ…、この前の資料が手元に届いたんだが、どうする？」

冬馬

「…これ以上、父さんに罪を重ねてほしくありません……
お願いします……助けてください」

そう言って深々と頭を下げた。

準

「若…、俺からも頼む!!」

準も頭を下げた。

小雪

「アキラ、助けてあげて、お願いだよ」

小雪が不安そうな顔で懇願している。

暁

「二人とも顔を上げてくれ、それと小雪もそんな不安そうな顔すんな！
友達を助けるのは当たり前だろ！」

そういうと三人の顔は、パァーと明るくなった。

小雪

「アキラ、大好き！」

ガバツ

小雪はアキラに抱きつきながらそう言った。

暁

「おい！ 離れろ！ 小雪。恥ずかしいだろ」

小雪

「ヤダ、離れないよ」

そのやり取りを冬馬達は笑いながら見ていた。

そして、その日のうちに葵紋病院がやっていた数々の悪事が露見する事になり、

院長と副院長は警察に逮捕され、葵紋病院は、潰れることになった。

i n u e d . . .

t o b e c o n t

第9話 『涙』（後書き）

作者「ということで、小雪編終わりました」

暁「パチパチパチ！」

作者「これでリユウゼツランルート行く未来はブチ壊れました」

暁「お」

作者「にしても今回は本当に悩みました」

暁「そういえば、結構時間かったね、今回」

作者「うん……」

暁「めずらしくおとなしいじゃないか？」

作者「相変わらず私、文才ないな」と

暁「それは、いつもの事だろ？」

作者「ひ、ひどい…でも反論できない（＞Д＜；）」

ドヨン

作者「どうせ…俺なんて…」

暁「部屋の隅っこでいじけ始めた（――；）」

作者「ぶつぶつ……」

暁「しゃーない、作者ほつといて、次回 第10話 『リュウゼツラン』

で、また会おう！」

作者「ぶつぶつ……」

第10話 『リュウゼツラン』（前書き）

という事で、リュウゼツランエピソードです。

第10話 『リュウゼツラン』

小雪が退院した数日後、

俺は風間ファミリーの面々に小雪達を紹介した。

翔一と一子は、すぐに小雪達を友達になり、

心配していた京と卓也は、心よく3人を仲間として迎え入れてくれた。

あとで京に聞いたのだが、小雪に自分と同じ感覚を覚えたようで

その後、小雪の事情を話すと納得した様だった。

卓也の場合は、準とゲームの話で盛り上がった為である。

残る大和と岳人だが、大和は様子見、岳人は反対していた。

理由は、なんとなくいけすかない。といった単純の物だったが、

他のメンバーの説得により、しぶしぶ仲間に入れることを認めてくれた。

何かきっかけがあれば、岳人も大和も3人を仲間として認めてくれるのだが……

しかし、そのきっかけはまもなくおとずれようとしていたのだった。

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

3人が仲間になった数日後、暁達はいつもの空き地に集まっていた。

翔一

「この縄張り、土管がいい味出してるよなー！」

小雪

「そうだね、ボクもこの空き地好きだな」

一子

「なんといっても広いわ」

冬馬

「そうですね」

準

「たしかにな」

卓也

「でも他には何もないけどね」

岳人

「十分だ」

居心地はよいが、さほど特色もない普通の空き地。

でもそのいつもの空き地で。

翔一

「なあおかしくねーか、この草大きくなりすぎ」

冬馬

「そう言えばそうですね」

準

「今まで2メートルぐらいだったのに」

卓也

「うん、今は3メートルぐらいありそうだね。」

京

「背伸びてるね」

小雪

「夏だから成長してるんじゃない？」

一子

「アタシも、成長しているわ」

岳人

「はは、そうかあ？　ちんちくりんじゃねーか」

一子

「ガクトがどんどん高くなっていくんでしょ！」

小雪

「そーだ、そーだ」

卓也

「ワン子も言い返すようになったねえ」

百代

「私に弟子入りしたのだから当然だ」

ワン子は、百代のカッコよさに惹かれ弟子になっていた。

一子

「うん、アタシ強くなる!」

百代

「よしよしその意気だ（頭なでなで）」

暁

「なんか、主人と飼い犬って感じだな」

一子

「ムウゝ暁ヒドイゝ」

暁

「はは、冗談だ」

卓也

「まあそれはおいといてこの草は成長期ってことで」

岳人

「俺様もこれぐらい高くなりたいぜ」

それから――2ヶ月後、季節は真夏。

準

「オイオイこの草もう5メートルこしてるぜ!？」

岳人

「実は妙な生き物じゃね。ある日ワン子の姿が消えた
…するとこの植物はワン子の身長分背が伸びていた」

一子

「怖いでしょうが!」

翔一

「ある日、ガクトの姿が消えた。するとこの植物が
花をつけた時、そこにガクトの顔が!」

一子・小雪

「キャー! 気持ち悪いー!!」

ワン子と小雪がごろごろとのたうつ。

百代

「ぬぬ……だが物理的に殴れるなら化け物も平気だ」

暁

「あれ、モモさんお化け苦手?」

百代

「ふん、うるさいな……ちょっとだけ、本当にちょっとだけだ」

大和

「まあ確かに殴れないモンね、ああいう類は」

暁

「俺は出来るけどな」

全員

「な、なんだって!!!!!!」

百代

「ほ、本当か？」

暁

「ああ」

大和

「師匠……本当に何でもありだな」

冬馬

「さすがの私も驚きましたよ」

卓也

「なんか驚きすぎて……」

そんな話をしていると岳人の母親の島津 麗子さんがやってきた。

麗子

「こらガクト！ 学校の先生からちゃんと宿題させるようにって電話来ちゃったじゃ……」

冬馬

「ガクト君のお母さん。丁度いいですね。聞いてみましょう」

冬馬は、麗子に事情を説明した。

麗子

「この草はアレだよ、竜舌蘭じゃないのかい」

卓也

「リュウゼツ……ラン？」

麗子

「そうさ。こんなレアな植物がこんな空き地にねえ」

大和

「へえ。これがセンチュリー・プラントだったのか」

岳人

「なんだその漫画の敵キャラのような名前は」

冬馬

「気候にもよりますが…数十年に1度しか咲かない花です」

大和の代わりに冬馬が答えた。

麗子

「あんたら本当に小学生かい大和ちゃんと冬馬ちゃん」

冬馬

「フフ。私が高校生だったら貴方を口説いていました」

大和

「同じく」

麗子

「この子達は悪党か芸人かどっちかになる気がするねえ」

そう呆れて言った。

麗子

「まあ百代ちゃんのお爺ちゃんがもつと詳しいんじゃない？」

百代

「では呼んでみよう。くくすっー！」

百代が息を吸い込んだ。

俺達は反射的に耳を塞いでいた。

百代

「ボケはじめてのブルセラじじい!!!!!!!!!!!!!!」

バビューン

風と共に川神 鉄心が現れた。

どこまで地獄耳なんだこの人……。

鉄心

「モモ！ お前いい度胸しとるのうー！」

卓也

「一瞬で来ちゃったよ。この一族は全く……」

百代は、鉄心に事情を説明した。

鉄心

「なるほど、こりゃまさに竜舌蘭じゃのう」

鉄心は思い出すように

鉄心

「ありゃたしか50年前かのう。確かに咲い妥妥た」

百代

「人間50年と同じ年数か。壮大だな」

鉄心

「この花はその子供って所かの。咲いて枯死する前に小株を根元近くに作り残すと聞いたが、よくはわからん」

暁

「わからないとは？」

鉄心

「この花は個体変異が大きくて、変種も多い為分類は難しいんじゃない。咲く年も花によって違うし」

鉄心

「まあ、明後日には黄色い花が咲きそうじゃの」

鉄心

「おっと、ルーと将棋の途中じゃったわい」

そう言った刹那、鉄心はその場から消えていた。

一子

「明後日開花かあ。楽しみよねえ」

小雪

「うん！　楽しみ」

百代

「まあな。粋なイベントがやってきたもんだ」

暁

「皆で写真撮るのもいいな」

翔一

「その場合、ガクトが写真撮影する係な」

岳人

「ちょっとまで、俺様が写らない事をどうするつもりだ」

一子

「あはは、卒業アルバムの欠席者みたいに上に」

岳人

「そんなネタ的に美味しいのはキャップにまわすぜ」

翔一

「確かに美味しいな」

卓也

「そこ考える所なんだ……」

大和

「でも写真かゝ、悪くないね」

冬馬

「ええ、悪くないですね」

京

「私も花が咲くの楽しみ」

暁

「ああ、楽しみだ」

本当に楽しみだ。

そして、いよいよ花が咲こうとしたその前夜。強烈な台風が関東に上陸した。

o b e c o n t i n u e d ……

t

第10話 『リュウゼツラン』（後書き）

作者「というわけでいかがだったでしょうか？」

暁「やっと真剣恋らしいエピソード出てきたな」

作者「やはりこのエピソードは無視できないから」

暁「たしかにね」

作者「今回はあとがき短いですが、次回 第11話 『護れ、リュウゼツラン』

でまた会いましょう！」

暁「では、またな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5712y/>

A.O.G ～真剣で代行者に恋しなさい！～

2011年11月24日10時57分発行